Osaka University Knowledge Archive

Title	ことばと社会（3）（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97307
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2023

ことばと社会③

秦　か　お　り
岡　本　能里子
セメノワ・アナスタシア
稲　葉　　皐
リ・ヘンチョン
山　本　由　実

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2024

言語文化共同研究プロジェクト 2023

ことばと社会③

目次

秦かおり
ウクライナ大統領ゼレンスキー氏のメディア表象
―各国演説のマルチモーダル談話分析―……..……..……..…… 1

岡本能里子
多様性に拓かれた空間デザイン
―公共サインの可能性と課題―...…….....11

セメノワ・アナスタシア
A Case Study of Multimodality and Strategic LGBT Narratives in Russian News
…….....18

稲葉皐
メディアに現れる留学経験者のステレオタイプ
―YouTube と TikTok 上の動画を事例に―…….....27

リ・ヘンチョン
少子化対策の成立における被害者と加害者
―フェミニスト批判的談話分析を用いて―…….....37

山本由実
制度的場面を持ち込んだインタビューにおける「フレーム」の変容過程
―教員-学生間の雑談開始・終了部に着目して―…….....47

ウクライナ大統領ゼレンスキー氏のメディア表象
―各国演説のマルチモーダル談話分析―

秦　かおり

１．はじめに

2022 年 2 月 24 日、ロシアのプーチン大統領は「特別軍事作戦」の名の下にウクライナに侵攻した。それは突然行われた行動ではなく、もともとロシアとウクライナは、強い緊張関係が続いていた。直接的な発端として、2014 年、ウクライナ領と国際的に定義されるクリミア半島をロシアが一方的にロシア領として編入したことが挙げられる。それ以降、この土地をめぐる紛争・対立がずっと続いていた。そして 2021 年、ウクライナは NATO と合同軍事演習を行い、NATO 軍を国際的な味方であるとして、ロシアとの対立を深めていった。アメリカはこの時期をロシア・ウクライナ危機と呼び、すでにこの頃には一触即発の状態であった。その流れの延長線上に、2022 年 2 月 24 日の今回の戦争は位置付けられる。ロシアはこれを「特別軍事作戦」と呼んだが、一方のウクライナのゼレンスキー大統領はこの特別軍事作戦を受けてウクライナ全土に「戒厳令」を発布し、18 歳から 60 歳までの男性に対し、原則として出国禁止とする「総動員令」を発令、これをもってウクライナ側はこの軍事作戦を「戦争」と位置づけ、戦闘状態に突入した。

このロシアの軍事侵攻に端を発したロシア・ウクライナ戦争[1]は、主としてウクライナ側が高度なメディア戦略を駆使し、大国から攻め込まれた小国として最も効率的、効果的な世界への発信戦略を成功させていたと言える。また、メディア戦略は、ゼレンスキー大統領だけが駆使したのではなく、より草の根の運動の一つとして、一般市民も SNS への投稿を行い、よりリアルな戦闘状態の悲惨さを直接世界に発信することを可能にした。

本稿では、特にゼレンスキー大統領が行った各国での演説（オンラインを含む）を題材としてマルチモーダル分析を行い、演説を外交政策の一つとして捉えてゼレンスキー大統領の表象を明らかにしていく。

２．ゼレンスキー大統領のメディア戦略

当初、ウクライナのゼレンスキー大統領は行方が分からず国外逃亡をしたのではないかとの憶測が流れた。これに対し、ゼレンスキー大統領は 2022 年 2 月 25 日、Instagram で自分もウクライナ政府幹部も皆ウクライナに残り大統領と行動を共にしていることを発信した（図 1）。その投稿は、キーウ市街を背景にゼレンスキー大統領自身が自撮りで撮影しており、逃亡しておらずキーウにいることを明示し、国外逃亡をしたというデマが「誤情報」であることを明確に発信すると同時に、ゼレンスキー大統領の戦う意志を示すことで国民を鼓舞する態度を示した。また、共に映る政府幹部一人一人を紹介しながら戦う姿勢を示している。彼らは一様にカーキ色の服を着ており、共に戦時下にあるということを明示した。

---

[1] ロシアはこれを「特別軍事作戦」であるとし、ロシア国内で「戦争」という言葉を使用するのを禁止している。日本政府は、これをロシアによるウクライナ侵攻と定義づけて報道した。現在では世界的に「ロシア・ウクライナ戦争」と呼ばれている。

図 1. 2022 年 2 月 25 日のゼレンスキー大統領の Instagram への投稿

翌日 2022 年 2 月 26 日、ゼレンスキー大統領は Twitter（現 X）で自らの無事とウクライナ国民を鼓舞するメッセージを投稿し、それは世界中に拡散された。これも前夜と同じく、大統領本人の自撮りで撮影され、その背景にはウクライナの市街が映っている（図 2）。

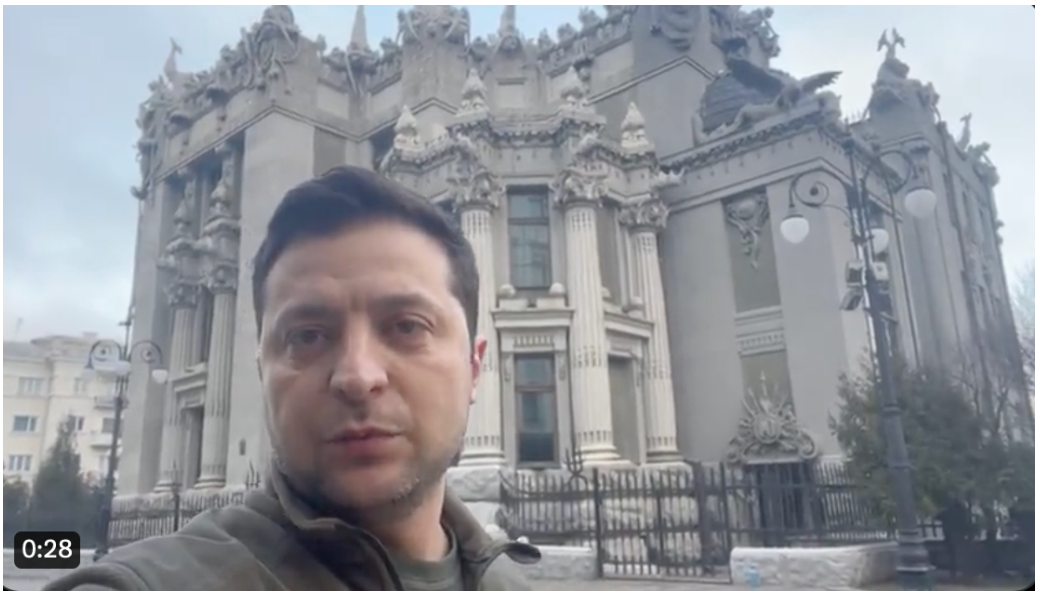

図 2. 2022 年 2 月 26 日のゼレンスキー大統領の Twitter への投稿

この発信の際、ゼレンスキー大統領はやはりカーキ色のシャツに、カーキ色のジャンパーのようなものを着ており、大統領が公の場でフォーマルに振る舞う様とはおよそ真逆の、軍事化の非常態勢であること、ゼレンスキー大統領自身が安全な場所に隠れているのではなく、「国民と共に戦っている」ことを印象付けるものだった。

この 2022 年 2 月 26 日の SNS 発信以降、ゼレンスキー大統領は状況の発信や国民の鼓舞のた

め、また国際社会への訴えのために、度々SNS を更新し、その度に常にこの服を着用して、この後現在に至るまで、ゼレンスキー大統領が着続けている戦闘下のアイコンとなった。

３．ゼレンスキー大統領の演説における表象

ロシアのウクライナ侵攻以降、国際社会、特にアメリカは率先してウクライナへの支援を表明し、武器の供与、資金援助を行った。ロシアはウクライナを非難するよりも、ウクライナの背後でウクライナを支援するアメリカや NATO を強く非難し、大国に飲み込まれる小国の図式に見えた本戦争は、ロシアとアメリカの代理戦争の意味合いが濃くなっていく。ゼレンスキー大統領は積極的に各国や国連の議会など、会議の場で演説をする機会を得て、「大国の理不尽に争う小国」である自分達ウクライナに支援を要請（あるいは依頼）した。

これらの演説の際、ゼレンスキー大統領は、およそ正式な場にはふさわしくないカーキ色の T シャツや長袖のトレーナーを着用し、自らを戦争のただ中にいる人物としての印象を堅持し続けた。しかし、ゼレンスキー大統領の演説そのものは各回によって微妙に異なる。その異なりは明らかに何かを意図している。しかしゼレンスキー大統領自身が何を意図したかということは語らないため、これは各国メディアがどのようにそれを論じたかを見ることによって読み取るしかない。もちろん、結果として各国メディアがどのような報道をしたかということと、ゼレンスキー大統領が何を意図していたかは必ずしも一致しない。送り手と受け手の間を繋いでいるメディアがどのような色を付けて報じるかが受け手としてのメディアのこちら側にいる私たちに何が届いていたのかを検証することとなる。

3.1 英国議会での演説

2022 年 3 月 8 日、ゼレンスキー大統領は、英国議会においてオンラインで演説を行った。この際、ゼレンスキー大統領はどこにいるのか場所は不明であるが白い背景にウクライナの国旗を立てて演説を行った。服装は 2 月 26 日に初めて SNS に姿を表した時から貫かれているカーキ色の軍服を思わせる服装で、今回は半袖の T シャツであった（図 3）。

図 3. 英国議会でのオンライン演説

図 4. 英国議会での聴衆（議員）のスーツ姿とゼレンスキー大統領の服装とのギャップ

この英国議会に参加している人々は基本的にフォーマルなスーツを着用しており、大きなモニターに T シャツ 1 枚のゼレンスキー大統領の服装は奇妙に映る（図 4）。議会での演説には相応しいとは考えられないこのスタイルは、ゼレンスキー大統領の戦時下のアイコンとして受け入れられ、服装を非難する声は聞かれなかった。

演説内容は、「偉大な歴史を持つ国の人々へ」と始まり、英国を称えた後に、1940 年の第 2 次世界大戦時に当時のチャーチル首相が行った演説に準えた内容で、ロシアのウクライナ侵攻以来の「13 日間に起こったこと」を淡々と時系列に従い述べていくものだった。この演説の中で、ゼレンスキー大統領は、ナチスになぞらえた例えをいくつも使用した。たとえば、「なぜなら、われわれのウクライナを失いたくないからです。ナチスが、あなた方の偉大な国、イギリスに対する戦いを始める準備をしていたときに、あなた方が国を失いたくなかったのと同じように。」、「6 日目に、ロシアのミサイルがバビヤールというキエフにある渓谷に落下しました。これは、第 2 次世界大戦中にナチスが 10 万人を処刑した場所です。80 年後、ロシアは再び彼らを殺したのです。」とし、英国にとってのナチスと、ウクライナにとってのロシアは類似していることを比喩することで、英国人によりわかりやすく状況を伝えたと言える。また、「生きるべきか、死ぬべきか（To be or not to be）」とシェイクスピアを引用し、ウクライナの人々は「生きるべき」であると述べた。この演説に対して、満席の英国議会はスタンディングオベーションで応えた。

図 5. 6. 満席の英国議会でのスタンディングオベーション

このように、ゼレンスキー大統領は各国の事情に合わせて変えるところ、ウクライナ大統領とし

て変えないところ（軍事危機下であることを示すカーキ色のシャツとジャンパー）を巧みに組み合わせていく。

3.2 EU に向けての最初の演説

2022 年 3 月 10 日、ゼレンスキー大統領は、EU に向けて初めての発信を行った。2 月 26 日の街中での発信とは異なり、大統領執務室と思われる部屋の中央に腰掛け、左側にはウクライナの国旗、手元の机の上には原稿と思しきメモが置かれている。椅子も先の英国議会での演説場所とは異なり、立派な椅子に腰掛けている。場所はフォーマルに整えられているが、ゼレンスキー大統領自身は、戦時下の自らのアイコンであるカーキ色のシャツとジャンパーを着用している（図 7）。

図 7. 2022 年 3 月 10 日の EU 諸国へ向けたゼレンスキー大統領の演説

この時のゼレンスキー大統領は、ウクライナ人に対してロシアが行った非道を淡々と報告している。身体は真っ直ぐカメラの方を向き、両手を机の上に置いている。基本的に微動だにしておらず、わずかに動くのは多少頭を振る程度（図 8）で、パンチラインを手のジェスチャーで強調するのみである（図 9）。

図 8. 当該演説で最も大きな頭の動き

図 9. 当該演説で最も大きなジェスチャー

頭を振る時も、目線はカメラから外さない。この時のメッセージは、国際社会に、ウクライナと

いう国が何をされているのかよりも、「ウクライナ人」が何をされているのかを訴えており、現在の侵略戦争は、軍人だけではなく、一般のウクライナ人に多大な犠牲が出ていることを述べている。それはロシアの非道と国際法違反を訴えるものであり、その後の多くの演説が具体的な支援を訴えていたのに対し、この演説では支援を訴えてはいてもそこまで具体的な金額や武器供与を要請するものではなかった。それよりも、大袈裟な身体動作を廃して淡々と現実を伝えることで、ロシアの非道を訴え、結果的に国際社会を味方につけることに成功している。

これに対し、英国のボリス・ジョンソン首相は、SNS でウクライナに対する更なる「支援（support）」の道を探ることを表明した。また、この頃から国際社会はロシアへの経済制裁を行うようになった。直接的な軍事的支援を行わなくても、間接的な経済制裁は、ロシア国内の経済状況の悪化を招いたが、ロシアの更なる態度の硬化と逆にロシアの影響下にある物資の輸出入の制限につながり、世界の経済への打撃を生んだ。

3.3 米国連邦議会での演説

2022 年 3 月 16 日、ゼレンスキー大統領はアメリカ連邦議会でオンライン演説を行った。この演説では、英国議会でオンライン演説を行った時と同じ白い背景の部屋に茶色い簡易的な椅子、左側にウクライナの国旗を掲げてオンラインに登場した（図 10）。

図 10. 米連邦議会での演説の様子

彼の戦時下のアイコンであるカーキ色の半袖の T シャツを着て机の上に両手を置き、正面を見据えている。連邦議会の議場では、ゼレンスキー大統領が大写しになり、画面の両側に米国旗が掲げられる中、人々がスタンディングオベーションで迎えていることがわかる。

ゼレンスキー大統領はこの演説においては「リーダー」を 11 回、「自由」を 9 回、「民主主義」を 3 回繰り返し述べて、人々は民主主義的に自由である権利を持っている（が、それが脅かされている）ということ、アメリカのリーダーシップが必要であることを強く述べた。さらに、パールハーバーと 9.11 を罪なき人々が巻き込まれた理不尽な出来事として述べ、米国が直接的に攻撃されたことのある歴史上重大な出来事とウクライナの今の立場を共起させ、理解を求めた。また、

具体的な支援策についても述べている。

この演説の後、日本では「パールハーバー」に反応した報道が見られた。日本を加害国とした出来事であるパールハーバーに言及したその1週間後に日本での国会演説を控え、ゼレンスキー大統領がどのように何を述べるのか、二枚舌のように見られないためには繊細な駆け引きが必要になってしまった。以下が日本国会での演説である。

3.4 日本の国会での演説

2022 年 3 月 23 日、ゼレンスキー大統領は日本の国会にてオンラインで演説を行った。おそらくは英国議会でオンライン演説をした時と同じ白い背景の部屋に茶色い椅子で、左側にウクライナの国旗を掲げてこちらを凝視し、ほとんど身じろぎせずに演説を行った（図 11）。

図 11. 日本の国会でのオンライン演説

この時、興味深いことに、ゼレンスキー大統領の服装に少し変化があった。これまでずっと首元を開けていたジャンパーのファスナーを一番上まで締めており（図 11 の四角の中）、またジャンパーの素材もこれまでのカジュアルなフリース素材のようなものではなく、少しだけフォーマルな服を着ていたことである。わずかな違いではあるが、日本の国会のフォーマリティに配慮した結果と考えられる。また、両手を机の上で組み合わせ（図 11 の下部）、余計なジェスチャーを排した、静的な態度で臨んでいる。

また、演説そのものも、他の演説に比べて口調も内容も穏やかであった。ゼレンスキー大統領は、日本以外の演説では、正義や非道を訴える力強い演説を行っているが、日本でのこの演説の中では、他の演説ではあまり使用していない「平和」ということばを 12 回も使用し、日本の文化を称え、戦後の復興への支援を「お願い」することに焦点を当てていた。日本の国際的な立場や日本の憲法による軍事上の制約を理解した上で、それらに抵触しないよう、注意深く演説内容を練り上げていたと言えるだろう。

さらに、ここでは「言わない」「触れない」戦略が見られた。他国の演説においてはその国の被災や敗戦などの歴史的事実を引用することで現在のウクライナの立場を理解してもらおうという戦略であったのに対し、日本の国会演説では、日本の過去の敗戦や被災には触れなかった。日本の各種メディアは、ゼレンスキー大統領が国会演説をする前にその演説内容を予測していた。日本で演説をするにあたって非常に難しく繊細かつ国際的な問題として、日本の過去に触れると、ウクライナにとっての 1 番の支援国であるアメリカをどうしても非難することになってしまう歴史的事実がある。原爆であれ敗戦であれ、もしそれを理不尽な出来事とするならば、その加害行

為をしたアメリカを非難しなければならない。ウクライナが外交上、それをすることはできないと分かっているため、一体どのような演説になるのか、メディアではさまざまな予測が飛び交った。結果として、ゼレンスキー大統領は日本での演説では一度も第二次世界大戦についても敗戦についても、原爆についても触れることはなく、「復興」、「反戦」、「平和」に焦点を当てて、終始復興後に言及して近々の支援よりも戦後の支援を訴えるものとなった。ここに、他国とは異なる、「言わない」「触れない」戦略が明確に見て取れた。

3.5 広島での演説

2023 年 5 月 21 日、開戦から 1 年以上が経過したウクライナのゼレンスキー大統領は、G7 広島サミットに合わせて来日し、広島で演説を行った。

図 12. G7 広島サミットの参加国

G7 広島サミットの参加者を撮影した図 12 では、ゼレンスキー大統領はホスト国である日本の岸田首相の隣に立っており、要人として手厚い歓待を受けていることが見て取れる。他の参加国はフォーマルな服装なのに対し、ゼレンスキー大統領は彼のトレードマークであるカーキ色の上下に戦闘靴という格好で立っている。彼は広島にいる間ずっとカーキ色の服を着用していたが、開戦から 1 年が経ったこの時期、彼の格好は当然のこととして受け入れられ、広島で献花する時にもこのスタイルを貫いている。ウクライナの国旗と同じ黄色と青の２色のリボンで束ねられた献花を行い（図 13)、ゼレンスキー大統領は演説と記者会見に挑んだ。

図 13. 広島で献花するゼレンスキー大統領

図 14. G7 広島サミットで演説をするゼレンスキー大統領

広島での演説（図 14）では、「だれが広島に原爆を落としたのか」を絶妙に回避しながら、ウクライナのチョルノービリ原子力発電所の事故を生き抜いてきた「われわれ」と、戦車で原子力発電所を砲撃した唯一のテロ国家である「ロシア」を対照化させ、平和を希求する私たち世界にとってロシアが脅威であると位置付けた。また、10 項目にわたる「平和のフォーミュラ（公式）」を提案し、その最初の項目は、「放射線と核の安全」であると述べ、ロシアが行っているこの戦争が世界最後の戦争になり平和を取り戻すこと、そして演説の最後には平和を祈り、戦争の犠牲者に対する追悼で演説を締めくくっている。ゼレンスキー大統領は全体として、「原子爆弾」ではなく「核の脅威」を原子力発電所の不法支配に置き換えて演説することで、ロシア以外を敵に回さずに演説を乗り切っている。

４．結語

本稿では、ウクライナのゼレンスキー大統領が世界各地で行った演説を題材に、その言語・非言語行動、その場を構成するあらゆる要素を勘案するマルチモーダル分析により、ゼレンスキー大統領が巧みに演説の内容・方法を変えていたことを具体的に示した。その結果、ゼレンスキー大統領の演説は、演説をした国だけではなく、その演説が全世界に配信されることを想定して、複雑な国際社会の中で非常に繊細に乗り切っていることがわかった。

また、この時期を考えるとコロナ禍およびコロナ後ということもあり、オンラインでの演説が比較的容易であったことがウクライナにとっては追い風であったことも特筆すべきことであろう。

2024 年現在、ロシア・ウクライナ戦争は何度も停戦の提案が出ながら実現せず、さらに多くの国がロシアとウクライナのどちらを支援するかによって、世界は分断されつつある。その中でも、ウクライナは武器の供与などの軍事支援を継続的に求めており、アメリカには「支援疲れ」と呼ばれる現象も見られる。アメリカの大統領選では、他国にどれくらい支援をするかが一つの争点ともなっており、ウクライナの置かれている現在の立場は優位とは言い難く、また終わりも見えない。今回分析した演説は戦争初期の頃のもので、その後はかなり強行的に支援を要請するものなどもあり、初期の演説における綿密な戦略はやや崩れつつある。今後、ウクライナがどのような演説を行うのか、メディア戦略を行うのか、注視していきたい。

参考文献

BBC (2022) In full: Ukrainian President Zelensky's message to UK, https://www.bbc.com/news/av/uk-politics-60666785?zephr-modal-register (最終閲覧: 2024 年 6 月 1 日)

池上彰(2022)「ゼレンスキー氏」各国演説の中身―「日本国民に伝えたかったこと」とは何か？―, 東洋経済 ONLINE. https://toyokeizai.net/articles/-/580030 (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NBC News (2022) Zelenskyy full speech: Ukrainian president implores Congress for aid, asks Biden 'to be the leader of peace', https://www.nbcnews.com/politics/congress/zelenskyy-full-speech-ukrainian-president-implores-congress-aid-asks-b-rcna20286 (最終閲覧: 2024 年 6 月 1 日)

NHK 国際ニュースナビ(2022) 【演説全文】ウクライナ ゼレンスキー大統領 何を語った？, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220315/k10013532101000.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NHK 国際ニュースナビ(2022) 【演説全文】ゼレンスキー大統領 EU 議会で何を語った？, https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/detail/2022/05/25/21292.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NHK 国際ニュースナビ(2022) 【演説全文】ウクライナ ゼレンスキー大統領 米議会で演説, https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/detail/2022/05/25/21298.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NHK 国際ニュースナビ(2022) 【全文】ウクライナ ゼレンスキー大統領 国会演説, https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/detail/2022/05/25/21285.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NHK 国際ニュースナビ(2022) 【演説全文】ゼレンスキー大統領 アメリカ議会で語ったことは？, https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/detail/2022/12/23/28186.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

NHK 国際ニュースナビ(2023)「ロシアを最後の侵略者に」 ゼレンスキー大統領【会見全文】, https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/detail/2023/05/22/31753.html (最終閲覧: 2024 年 5 月 24 日)

首相官邸(2023) 「G7 サミットゼレンスキー大統領ー令和 5 年 5 月 21 日, https://www.youtube.com/watch?v=wrT9AgVWx2I (最終閲覧 2024 年 6 月 1 日)

徳力基彦(2022) 「ロシアのミサイルにスマホで対抗する、ウクライナ大統領に学ぶ「言葉の力」」, https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/49831f26939ceb610b577b8f3f2b25ea4318414f

Volodymyr Zelenskyy (2022) X, https://x.com/ZelenskyyUa/status/1497450853380280320 (最終閲覧:2024 年 6 月 1 日)

Volodymyr Zelenskyy (2022) Instagram, https://www.instagram.com/p/CaaFzibgLES/?utm_source=ig_embed&utm_campaign=embed_video_watch_again (最終閲覧: 2024 年 6 月 1 日)

Wall Street Journal (2022) "Video: Ukrainian President Zelensky Says Country's Leaders Remain in Kyiv", https://www.wsj.com/video/series/on-the-news/china-lands-spacecraft-on-moons-hidden-side-to-collect-samples/28436A15-3B5B-45E7-9FB4-D74B155F6A59

メディアに現れる留学経験者のステレオタイプ
―YouTube と TikTok 上の動画を事例に―[1]

稲葉　皐

１．はじめに

現代の日本社会において、留学経験者にはグローバル人材としてこれからの日本を担う役割が期待されている。首相官邸（2012: 8）がまとめた報告書では、グローバル人材の定義として以下の３つが挙げられている。

要素 I: 語学力・コミュニケーション能力
要素 II: 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素 III: 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

今日の技術革新や、あらゆる分野で様々なヒト、モノ、カネが移動する時代に対応する人材として、グローバル人材は上記の要素を持ち合わせることが求められている。特に、文部科学省（2022）は、海外での経験や多様な価値観を持つ人々との交流は異文化理解やアイデンティティの確立等につながるとし、「日本の未来を創るグローバル・リーダー人材を育成」するため、日本人学生の留学に力を入れようと試みている。しかし、YouTube 等のメディア[2]に投稿されている留学経験者を扱った動画に目を遣ると、彼ら／彼女らを嘲笑の対象として描いているものが目を引く。メディアの中で特定の人物像に言及することは、それらの人物像の「いじり」として様々な番組の中で使用されていた（大石・大石, 2019）。望月ら（2017）が行った調査では、メディアによって広まったいじりの演出は、「いじりというラベルがつくことで第三者の視点からはその行動が笑いなど肯定的であると考えられる側面と関連する行動と認識され得る（p.11）」ということが明らかになった。しかし、大石ら（2019: 43）は、「相手の嫌な面に対する若干の攻撃性を秘めて冗談包んだ表現」を「いじり」であると指摘しており、特定の人物像を対象にする「いじり」は必ずしも肯定的に捉えられることはできない。留学経験者を嘲笑の対象として描いている動画では、留学経験者の言動や行動が、彼ら／彼女らのステレオタイプとして表象され、それを「いじり」の対象とみなしていると考えられる。

現状では、留学経験者は日本社会に肯定的な影響を与え得る存在として捉えられている。一方で、動画の中では留学経験のある日本人が笑いの対象として描かれている。このような留学経験者の表象や、留学経験者にまつわる偏見はメディアを通して再生産されていくと予想される。本研究では、特に YouTube・TikTok に投稿されている留学経験者に関する内容の動画に見られる留学経験者の表象を対象に、マルチモーダルな観点から分析を行う。そして、動画に現れる留学経験者の特徴を記述し、それがいかに留学経験者のステレオタイプとして視聴者に作用しているのか、現代のメディアの解釈の形とともに読み解いていく。このことから、本稿のリサーチクエスチョンは以下の通りに設定する。

(1)　メディアの中では、どのような言動が留学経験者の特徴として描かれているのか
(2)　それらの特徴は、動画の中でどのように作用しているのか

上記のリサーチクエスチョンを明らかにすることにより、メディアに見られる留学経験者の特

徴の一端をあぶり出し、動画投稿サービスに潜む特定の人物像のステレオタイプの構築とその問題点を指摘する。

２．メディアに関する研究

近年では、インターネット上に投稿された動画などのメディアを言語人類学の視点から分析し、そこに現れる言語イデオロギー等を研究しているものがある。例えば、Bucholtz（2010）は 1990 年代後半から 2000 年代のハリウッドの「wigger[3]」映画において表象されるジェンダーや人種のイデオロギー、そこに埋め込まれた声を言語人類学の観点から分析している。若者をターゲットにしたハリウッド映画では、wigger 像はヒップホップが好きな中流階級あるいは郊外に住む不真面目な白人男性として表象される。Bucholtz はハリウッド映画における wigger の話し方を「White Hollywood AAE[4]（p.259）」と定義した。Bucholtz によると、White Hollywood AAE は 1990 年代の若者の姿ではなく、AAE に関わる人種的な言語イデオロギーと、黒人／白人という人種的、性別的なステレオタイプを作る保守的な表現である。wigger 映画は白人ヒップホップファンを「ばかげた wigger 像」として再構成し、黒人の文化であったヒップホップに白人が関与することがもたらす人種的脅威を緩和させた。しかし、このことは「White Hollywood AAE」のように、言語に対するイデオロギーの構築をもたらし、黒人と白人の境界を強化したと Bucholtz は指摘している。

Sierra（2019）は、メディアは言語的・文化的なステレオタイプを（再）生産する（p.186）と主張し、そのようなステレオタイプに基づいた表現を日常生活で使用することの意味や、アイデンティティに関するメディアのステレオタイプについて論じている。例えば友人同士の会話における黒人女性のミームの使用は、「強く自立した黒人女性」を指すことができるため、表面的には「ポジティブ」なものである。しかし、そこにはすべての黒人が AAE を使用するというステレオタイプや、AAE を話す黒人女性を強さや格好良さの指標として本質化した言語イデオロギーが存在し、日常で使用されることでそのステレオタイプやイデオロギーが強化されると Sierra は指摘した（p.192）。このように、メディアで表象される言葉を日常生活の中で使用することは、個人や集団のアイデンティティを構築することが可能である。

現在、我々の日常生活において様々なソーシャルメディアが頻繁に使用されていることから、Ahearn（2021）は社会的、政治的、経済的、文化的なダイナミクスがソーシャルメディアの使用法や解釈に影響を与えると指摘し、Twitter、Facebook、Instagram、TikTok などのプラットフォームごとに異なる言語実践の存在があると論じている。伊藤（2022: 64）は、上述のプラットフォームを含む SNS では、「相互行為がコミュニケーションとして行われるだけではなく、より明確な相互評価、さらにある種の「値付け」として行われる」と述べている。例えば YouTube の動画投稿者は、自身が制作する動画の中で「自己イメージを提示（伊藤, 2022: 64）」し、その動画の視聴者は「いいね」等のリアクションを送ることが可能である。これが動画に対する評価となり、この評価は「明確に数字化される（伊藤, 2019: 64）」ことから、動画投稿者はさらに多くのリアクションを得るために工夫を凝らしていく。また、津田（2024）は、インターネットでのコミュニケーションの特徴としてその「多様性と流動性（p.75）」を挙げている。つまり、インターネットでは、メッセージを発信する側の規模と受信する側の規模が固定されておらず、やりとりによっては一方的なコミュニケーションから個人間のコミュニケーションへとその姿を変化させることが可能である。また、インターネット上のコミュニケーションでは、ある特定の人物等に対し、不特定多数から批判が集まり、拡散される「炎上」や、誹謗中傷にもつながる可能性があることも指摘

されている（伊藤, 2019; 津田, 2024）。本稿の「はじめに」で言及したように、特定の人物に対する「いじり」で笑いを産むという演出がメディアで行われてきた。これは、炎上や誹謗中傷の程度には届かない可能性があるものの、インターネット上に投稿されている動画にみられる「いじり」が特定の人物像を固定化し、投稿者と視聴者のコミュニケーションによってそれが強化されている状況が存在すると考えられる。

従来は新聞やテレビがマスメディアとして普及していたが、現在、我々は日々の生活の中で様々なソーシャルメディアから情報を受け取っている。Bucholtz や Sierra が指摘するように、これらのプラットフォームで拡散される言語実践を日常で使用することにより、ステレオタイプを（再）生産していると考えられる。本研究では、こうした背景をふまえ、YouTube と TikTok というメディアプラットフォームにアップロードされている留学経験者の動画を分析し、そこに存在する留学経験者に関するステレオタイプの一端を明らかにしていく。

３．データと分析方法

本研究で扱うデータは筆者が修士論文執筆の際に収集した 339 本の YouTube、TikTok、Instagram の動画の中から、YouTube と TikTok 上に投稿されている２つの動画を抜粋し、分析する。なお、本稿では動画系メディアに投稿されている動画を分析の対象にするため、Instagram 上の動画の分析は割愛する。

収集の基準として、総務省(2023)が発表した『令和４年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』より、本研究では、10 代・20 代で高い利用率を持つ動画共有系メディアサービスである「YouTube」と「TikTok」の２つの媒体において「留学」「留学あるある」「留学生活」と検索し、留学経験者の言語使用について言及している映像資料を選択した。データ収集の際には、動画の再生回数が１万回以上であること、また全媒体に共通して、収集時（2021 年 12 月）において投稿日が３年以内(2019 年以降)であることを確認した。本研究では、表１にある動画をデータとして分析する。

表１．動画データの概要

媒体	投稿者	タイトル	再生回数	投稿日
YouTube	もえぴ英会話	【帰国後あるある】日本に帰った留学生の日常はこんな感じ	17,950 回	2021 年 3 月 20 日
TikTok	Mayu	留学した人あるある	164.6K	2022 年 1 月 8 日

（2024 年 5 月現在）

上記の動画を抜粋した理由として、帰国後の女性留学経験者の姿や言動を再現している共通点があることが挙げられる。これらの動画の中で、本研究では留学経験者のステレオタイプが表出されていると考えられる場面に焦点を当てる。

なお、分析に使用するそれぞれの媒体の特徴について以下に簡単に記述する。YouTube は動画投稿サイト・アプリであり、世界中で利用されている。投稿者は「チャンネル」を持ち、各自のチャンネルに作成した動画や「YouTube ショート」と呼ばれる短編動画を投稿する。これらの動画を閲覧した視聴者はひとつひとつの投稿物に対してコメントや「いいね」などの評価をつけることができ、投稿者と交流できる。

TikTok は現在、若者の間で急速に普及している動画投稿アプリである。ユーザーは基本的に 15

秒から 60 秒ほどの短い動画を視聴し、アプリを開くと検索履歴や閲覧動画に基づいて表示される「おすすめ」動画が次々と再生される。動画はスマートフォンの画面に合わせた縦型で作成され、BGM やエフェクト・字幕等がふんだんに使用されていることが特徴である。また、YouTube と同様にコメントや「いいね」をつけることも可能である。さらに、ユーザーは TikTok 上の音源を利用し、自由に動画を作成・投稿できるため、動画の再生産・拡散が容易に行われる。YouTube と TikTok は若者への普及率が高く、彼ら／彼女らにとってこれらの媒体の使用は新たなメディアとして日常の生活の一部となっていると考えられる。本研究では、それぞれのプラットフォームの特徴でもある動画の概要欄やコメント欄をも含めて、談話分析とマルチモーダル分析を行う。

４．分析結果

4.1. もえぴ英会話『【留学前後あるある】帰国後に海外かぶれ炸裂！』(YouTube)

YouTube の動画投稿者である「もえぴ英会話」は、「楽しく英語にアプローチする動画」として、英会話や英語の学習方法、海外留学に関する動画を投稿している。本研究で取り上げる動画は３分２７秒の長さのものであり、全体を通して留学経験者の言動を留学前後で対比させることによって、留学経験者が「海外かぶれ」になっている様子を提示している。以下の抜粋は 1:25 から開始する「ボディタッチ」の場面の一部である。登場人物は留学経験者のもえぴ（トランスクリプトにおける M）とその友人（F）である。

抜粋１) 「ボディタッチ（1:25〜2:42)」
032.M: .h [え. ボディタッチってさ::
033. [(字幕)えボディタッチってさ
034. [sss- そう. 脈ありだよね,
035. [(字幕) そう、脈ありだよね
（途中省略）
059.M: [((前髪を書き上げる動作))
060. [(字幕) 留学後
061. [(字幕) ハグはご挨拶・海外のカルチャーが染みつく
062.M: .hhhh [oh (0.2) my gosh.
063. [(字幕) oh my gosh
064.M: .hhh [久しぶり:::: hhhhhhh
065. [((ハグをするジェスチャー))
066. [(字幕) 久しぶり
067.M: [元気だっ↑た:::
068. [(字幕) 元気だった
069.M: [やばすぎ::
070. [(字幕)やばすぎぃ
071.M: [え. 私が留学から帰ってきてから初めて会うよね?
072. [(字幕) 私が帰ってきてから初めて会うよね？
073. (0.8)
074.M: .hh [あ:::: 嬉しい::::

075.M:　　[((ハグのジェスチャー))
076.　　[(字幕) 嬉しい
077.　　[え. なになになになに
078.　　[(字幕) えなになになに
079.F:　　[いやめちゃくちゃアメリカンになってるじゃん
080.　　[(字幕) いやめちゃくちゃアメリカンになってるじゃん
081.M:　　@@@@ .hh hhh [ごめ::ん.
082.　　[(字幕) ごめん
083.M:　　[向こうだとハグがご挨拶だから. .hh
084.　　[(字幕) 向こうだとハグがご挨拶だから
085.M:　　[なんも考えずにハグしまくっちゃった
086.　　ごめんね, @@@
087.　　[(字幕) なんも考えずにハグしまくっちゃったごめんね
088.M:　　もうね:: [American culture が結構染みついちゃって::
089.　　[(字幕) American culture が染みついちゃって
090.M:　　[取(h)れ(h)な(h)く(h)て(h) .hhhh
091.　　[(字幕) 取れなくて

まず、32 行目から開始する「留学前」では、異性からのボディタッチは「チャラい（抜粋外）」と評価し、そのボディタッチは相手が自身に好意を寄せている「脈あり（34・35 行目）」の証拠であると M が述べた。一方、前髪を掻き上げる動作（59 行目）から開始する「留学後」の姿では、留学前とは異なる価値観を持つ留学経験者が描かれている。このことは、画面下側に大きく表示された「留学後（60 行目）」「ハグはご挨拶・海外のカルチャーが染みつく（61 行目）」という、動画の解釈を視聴者に示し、動画の内容を理解するための方向付けをおこなう「解釈型テロップ（塩田, 2005: 35）」で表示されていることからも、ボディタッチが「チャラい」ものから「挨拶」のように日常的に行われるものであると、留学経験者が留学を経験し、留学前に持っていた考えが変化した様子見て取れる。次に、62 行目で M が「oh (0.2) my gosh.」と英語で発話した後、日本語に言葉を切り替え 、「久しぶり:::: hhhhhhh（64 行目）」と述べた。加えて、帰国後に再会した嬉しさから、友人にハグをした（65 行目）。この M の姿に対して、彼女の友人である F は、彼女を「アメリカンになってる（79 行目）」と評価している様子がその発話から見て取れる。また、このことは、動画のタイトルにもなっている「海外かぶれ」が「炸裂」している様子であると友人がみなした場面であると解釈できる。留学を経験し、友人 F から「アメリカン」になっていると評価づけられた M は、81 行目で謝罪を行いながらも、留学先である「向こう（83 行目）」では、挨拶のように日常的にハグを行なっていたことに言及し、「もうね:: American culture が結構染みついちゃって::（88 行目）」と日本語の中に英単語が入るコードスイッチング（Gumperz, 1982、以下 CS）を伴って発言した。この様子から、留学経験者は留学先の文化の 1 つであったハグをすることがすでに身についている行為として、CS を行いながら自身の言動を正当化していることがわかる。すなわち、留学経験者が自身の「海外かぶれ」を否定せず、CS を行うことによって「アメリカン」な自己を演出するイメージを作り出していると考えられる。また、この留学先で身に付けた文化が「取(h)れ(h)な(h)く(h)て(h)（90 行目）」と、笑いながら発言していることから、留学経験

者は帰国後も留学先で経験した文化を日本の生活の中で維持している姿が見てとれる。まとめると、留学経験者が行う CS やハグなどのジェスチャーは彼女たちの癖であり、止めることができない行為であるという留学経験者に関するイメージが演者である M の様子を含め、画面に見られる「解釈型テロップ（塩田, 2005: 35）」等からも表象されていると考えられる。

この動画のコメント欄を参照すると、動画の内容を肯定的に捉えたものも確認される。しかし、「留学後に向こうの文化ガッシガシに掴んでくるのもいいけど、向こうに行ったからこそ日本文化の良さにも気付いてほしいよね（目を細めた笑顔の絵文字）でも大抵の子が日本 dis はじめちゃうイメージ（３つの水滴の絵文字）」というコメントのように、動画の内容に言及するだけでなく、動画の中で留学経験者を演じた M の言動をきっかけに、それを超えて留学経験者一般に対する意見を陳述しているものが見られる。このコメントに対して、返信という形式で、「もえぴさんは決してこの動画で日本を dis してないと思います。もしそう思われるのでしたら、あなたさまが本動画の日本に悪印象を自覚しているのだと思います。」と別の視聴者が動画投稿者である M を擁護していると考えられる意見を投稿している。また、元のコメントをつけた視聴者は「もえぴさんが日本 dis してるとは言ってませんので安心して下さいませ(o・ω・o)！」と絵文字ではなく、顔文字をつけたコメントをさらに返信している。ここでは、「日本を dis」しているのは投稿者である M ではないということが強調されている。一方で、「日本を dis」しているのは留学経験者一般であると視聴者が再度主張し、そのイメージが再生産されていることがわかる。このように、投稿者が作成した動画をきっかけに、留学経験者についてコメント欄で議論が行われている様子も本データでは観察された。

以上のことから、メディアにおける留学経験者の行動や言語使用からも、留学経験者は動画のタイトルにもなっている帰国後に「海外かぶれ」になるというステレオタイプの構築につながると考えられる。また、コメントによって視聴者の意見が視覚化され、それを読んだ別の視聴者がさらに自身の意見を投稿することで留学経験者のイメージが構築されている様子が見てとれた。

4.2. Mayu 『留学した人あるある』（TikTok）

次に取りあげる TikTok 上の動画は、アメリカにおける 2 年間の留学経験がある Mayu が留学や英語の勉強法に関する動画を投稿しているものの中から抜粋した。分析する動画は全部で 29 秒間の長さであり、帰国した留学経験者のふるまいが Mayu（トランスクリプトにおける M）によって再現されている。

抜粋２）「留学した人あるある」（TikTok）

001. M: [留学した人あるある
002. [(字幕) 留学した人あるある
003. M: He::y 久しぶり:: [元気だった::?
004. [(字幕) 眩しくないのに(サングラスの絵文字)
005. M: あ. ごめんごめんこれね::
006. [向こう日差し強くってもう
007. [(字幕) 留学先は「むこう、あっち」
008. M: sunglasses 必須って感じで::
009. .hh [え. てかむっちゃ fashionable じゃな::い,

010.　　[(字幕) とにかく英単語言いたい
011. M:　.h 私なんて毎日もう. leggings と [hoodie で::
012.　　[(字幕) 格好がテキトー
013. M:　そう. 多いからさ. あっちは::
014.　(0.2)
015. M:　あ. そうだね, selfie しよ, selfie. ちょっと待って::,
016.　(0.7)
017. M:　行くよ::?
018.　[((携帯を取り出し、内カメラで自分の写真を撮る))
019.　[(字幕) 自撮りポージングの癖
020. M:　((顔を左右に傾け、ポーズをとる))
021.　((舌を出す)

動画の冒頭では、サングラスをかけた M と同時に、視聴者に番組の内容やそのコンテクストの解釈の方向性を示す「情報明示型テロップ （塩田, 2005: 34-35）」として、画面中央に「留学した人あるある」というテロップが表示される。

まず、この動画で顕著に現れている留学経験者である M の行動は、３行目の「He::y」、８行目の「sunglasses」、９行目の「fashionable」、11 行目の「leggings」と「hoodie」、そして 15 行目「selfie」のような英単語を日本語の中で切り替えながら話す、CS を行う様子である。前節で分析した YouTube の動画と同様に、この様子は、「とにかく英単語言いたい（10 行目）」という「解釈型テロップ（塩田, 2005: 35）」の形で、留学経験者の言語使用に対する投稿者の評価が描かれていることがわかる。すなわち、留学経験者は「とにかく」会話の中に英単語を混ぜたいという、彼ら／彼女らが行う言語使用に関するステレオタイプとして再生産されている様子がこの場面から見て取れる。また、M が「眩しくないのにサングラスをかけている（４行目）」ことを説明している「解釈型テロップ（塩田 2005）」が動画の冒頭に表示されることは注目に値する。近年では、ファッションの一部としてサングラスを着用する人々が存在するが、本来、サングラスは直射日光や紫外線から目を防ぐために使用する。そのため、「眩しい」時に使用することがサングラスの一般的な用途であると考えられる。この動画で「(字幕) 眩しくないのに(サングラスの絵文字)（４行目）」と提示されていることは、すなわち、サングラスを使用する必要がない状況にも関わらず、それを着用している姿を、留学経験者の特徴的な行動として解釈することを視聴者に促していると考えられる。その後、サングラスの着用について、M は、「向こう日差し強くってもう（６行目）」と述べている。このセリフでは、「向こう」である留学先では、日差しが強いために、M が常にサングラスを着用していた情景が想起される。そして、動画の中で再現されている「帰国後の日常生活」の中で、その行動を「コミュニケーションに関連づけ（榎本, 2019: 29）」る様子が描かれていることがわかる。つまり、この一連のテロップの使用と M のセリフから、留学経験者は留学先で習慣にしていた行動を帰国後も継続し、「眩しくない」のにサングラスを着用していることを正当化させている姿が留学経験者のステレオタイプとして表出されていることが見てとれる。その後、M は９行目で、「.hh [え. てかむっちゃ fashionable じゃな::い,」と述べ、会話の流れを服装に関する話題へと変更した。続けて M は「.h 私なんて毎日もう. leggings と [hoodie で::」と発言し、M が現在着用している服装と対話相手が着ている「fashionable（10 行目）」な日本の服装とを

対比させている。さらに、このセリフには、「格好がテキトー（13 行目）」という「解釈型テロップ（塩田, 2005: 35）」が付けられていることからも、M が着用している服装はいい加減なものであり、自身もそれを理解していることが窺える。しかし、この「テキトー（13 行目）」な格好は、留学先である「あっち（13 行目）」で頻繁に見られる格好であると M は述べている。このことから、サングラスの着用に加えて、服装に関しても、留学先で培った習慣を帰国後も維持している留学経験者の様子がステレオタイプとして描かれていると考えられる。

この動画の概要欄には、「海外かぶれってやつ？ #アメリカ #留学 #あるあるシリーズ」とハッシュタグを用いて動画の説明が書かれている。つまり、この動画に現れる留学経験者は「海外かぶれ」であり、留学先の文化や慣習に強く影響を受けることが、「あるある」という言動として頻繁に起こるものであると設定されているのである。投稿者がこのような留学経験者の言語使用や服装をステレオタイプとして描く動画を作成・投稿することで、これらの言動が留学経験者に「よく見られる」実態として発信される。そして、このような動画の視聴者は、留学経験者を「海外かぶれ」であると理解する可能性があると考えられる。この動画には、本稿を執筆する時点で 75 件のコメントが投稿されており、「英単語言いたいってすっごいわかる w[5]使っていかないと忘れちゃうし、日本語が出てこない時は英語言うしかないし w」や、「むこう、あっちは言っちゃう ww」など、動画の内容に賛同するコメントが見られる。また、「今年留学台湾に留学するんですけど、オールイングリッシュの学科に行くので、日本語下手になるのが楽しみでたまりません（笑いながら泣いている絵文字）（笑いながら泣いている絵文字）」のように、動画に描かれていたステレオタイプ的な留学経験者になることを「楽しみ」にしているというコメントも観察された。これらのコメントには、投稿者からの「いいね」や返信の形でコメントが付けられているものもあり、動画投稿者と視聴者のコミュニケーションが行われ、留学経験者のステレオタイプを強化している場として機能しているのではないかと考えられる。

５．考察と結語

最後に、分析をまとめながら、考察としてリサーチクエスチョンに回答する。

(1)　メディアの中では、どのような言動が留学経験者の特徴として描かれているのか

上記の分析から、「留学前後で変化した価値観や話し方、ジェスチャー（抜粋１）」「とにかく英単語を言いたい様子（抜粋２）」という留学経験者の様子が彼ら／彼女らの特徴として描かれていた。また、「向こう（抜粋１・２）」など、留学先と日本を対比させることで、留学経験者が帰国後に行う振る舞いを正当化し、笑いのポイントとして描かれていた。さらに、「英語と日本語を切り替える CS を行う様子」は、留学経験者による特定の行動として、本稿で扱った動画に共通して表象されていることも明らかになった。

(2)　それらの特徴は、動画の中でどのように作用しているのか

RQ１で明らかになったように、留学経験者の様子を再現する動画では、留学を経験したことにより、彼女たちの価値観やふるまい、服装が変化した姿や、英語と日本語を切り替える話し方が特徴として描かれていたことがわかった。特に、本稿で取り扱った動画に共通して見られた英語と日本語の CS を行う留学経験者の様子は、彼ら／彼女らのステレオタイプ的な姿として表象されていた。一般に、日本人は「英語が苦手だ」と言われている（荒木, 1986; 中島, 2004; 星野, 2009）。また、英語ができることは「かっこいい」とも思われている（星野, 2009; 田中, 2017）。一方で、

大石（1990）によると、社会では「英語など外国語を話す日本人は日本人でなくなる（p.67）」と見なされる。日本人が苦手とする英語を用いて CS を行い、留学先で習慣化したふるまいや服装を帰国後も継続している留学経験者を「海外かぶれ」と表象することは、メディアの中で留学経験者を「いじり」の対象として描いていると考えられる。日本社会の規範を逸脱し留学先の言語・文化を日常生活に取り入れる留学経験者の姿を投稿者が動画を通じて発信することで、特定の人物像に対するステレオタイプを生産することにつながる。動画投稿者たちは、動画に描かれている留学経験者を必ずしも嘲笑や「いじり」の対象として描きたかったわけではないかもしれない。しかし、本稿の分析では、動画を視聴した人々がコメント欄等を使用して、留学経験者のイメージを一般化し、評価していた様子が明らかになった。また、動画のコメント欄で視聴者の意見が可視化されていることから、留学経験者にまつわるステレオタイプが強化されている可能性が考えられる。Bucholtz（2010）や Sierra（2019）が言うように、メディアが生産した特定の人物像や人種のイデオロギーを人々が目にする・実践することでそれらは強化・再生産される。まず動画の投稿者が「留学経験者は海外かぶれになる」というステレオタイプが表象されている動画を作成し、それを「あるある」などと留学経験者の行動として一括りにすることで、その行動が留学経験者の実態として存在しているように描かれる。さらに、動画を見た視聴者がコメントを投稿することで、実際の留学経験者が「いじり」の対象として投稿者と視聴者の間でそのイメージが構築されていくと考えられる。留学を経て、語学力や異文化理解能力を身に付け、グローバル人材として活躍が期待される留学経験者の言動が「海外かぶれ」として描かれることは、ステレオタイプに基づく偏見が広がっていく可能性があるのではないだろうか。

最後に、本稿では、留学経験者の言語使用やふるまいが「海外かぶれ」として動画の中で表象され、それがメディアの中で留学経験者のステレオタイプとなっていることを明らかにした。不特定多数が視聴可能な動画でこのような特定の人物像に関するイメージが再生産・再構築されることは、個人の存在を蔑ろにすることにつながると考えられる。本研究では、留学経験者にまつわるステレオタイプのごく一部の形態を解明したに過ぎない。今後は、メディアのデータだけではなく、実際の留学経験者や留学未経験者にインタビューを実施し、留学経験者に関する言説を明らかにしていきたい。

参考文献

Ahearn, L. M.（2021）*Living Language: An Introduction to Linguistic Anthropology*（3rd ed.）Malden: Wiley-Blackwell.

荒木博之（1986）『日本人の英語感覚　なぜうまくなれないのか―英語苦手の構造』PHP 研究所

Bucholtz, M.（2011）Race and the re-embodied voice in Hollywood film. *Language & Communication*, 31: 255-265.

榎本剛士（2019）『学校英語教育のコミュニケーション論「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論』大阪大学出版会

Gumperz, J.（1982）*Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.（=2004, 井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘（訳）『認知と相互行為の社会言語学ディスコースストラテジー』, 松柏社）

星野三喜夫（2009）『たかが英語、されど英語　日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』株式会社星雲社

伊藤昌亮（2022）『炎上社会を考える　自粛警察からキャンセルカルチャーまで』中央公論新社

串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房

望月正哉・澤海崇文・瀧澤純・吉澤英里（2017）「「からかい」や「いじめ」と比較した「いじり」の特徴」対人社会心理学研究，17, 7–13.
文部科学省（2022）「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性～コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて～」https://www.mext.go.jp/content/20220913-mxt_koutou03-000024166_1.pdf（閲覧日：2022 年 10 月 16 日）
中島義道（2004）『英語コンプレックス脱出』NTT 出版株式会社
大石俊一（1990）『「英語」イデオロギーを問う一西欧精神との格闘一』開文社出版
大石由起子・大石英史（2019）「いじめ問題における「いじり」概念に関する考察–いじめ未然防止教育の視点から–」山口県立大学学術情報, 12, 39-49.
首相官邸（2012）「グローバル人材育成戦略　(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy04/pdf/20120604/shiryo2.pdf　（最終閲覧日：2024 年 5 月 29 日）
Sierra, S.（2019）Linguistic and ethnic media stereotypes in everyday talk: Humor and identity construction among friends. *Journal of Pragmatics*, 152: 186-199.
塩田英子（2005）「バラエティ番組における文字テロップの役割　発話理解のしくみを探る」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰 編（2005）『メディアとことば２』, 32-58. ひつじ書房
総務省（2023）『令和 4 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』https://www.soumu.go.jp/main_content/000887589.pdf（最終閲覧日：2024 年 5 月 11 日）
田中浩司（2017）『日本人として英語を学び英語を使う　グローバル時代を生きる若者たちへ』株式会社新評論
津田正太郎（2024）『ネットはなぜいつも揉めているのか』株式会社筑摩書房

分析資料

Mayu（2022 年 1 月 8 日）『留学した人あるある』https://vt.tiktok.com/ZSYJAccj5/（最終閲覧日：2024 年 5 月 11 日）
もえぴ英会話（2021 年 3 月 20 日）『【留学前後あるある】帰国後に海外かぶれ炸裂！』https://youtu.be/aj4MPczAEjc（最終閲覧日：2024 年 5 月 11 日）

トランスクリプト記号

(1.0)	1.0 秒の音声のない状態	↑	直前の発話の顕著なイントネーションの上昇
=	途切れなく密着した会話	h	呼気音
[	発話の重なりの開始	.h	吸気音
:	直前の音の引き延ばし.	(h)	笑いながら発話
.	下降イントネーション	@	笑い
,	継続調イントネーション	(( ))	ジェスチャー等の非言語行動
?	上昇イントネーション		

---

[1] 本研究は 2023 年 6 月 29 日に開催された大阪大学言語文化学会 第 62 回大会の発表に大幅な修正を加えたものである。
[2] 本研究では、テレビ・新聞などのマスメディアに加え、YouTube や TikTok・Instagram などの SNS を含めたソーシャルメディアのことを「メディア」と呼ぶ。
[3] 「wigger」とは、“white nigger”から派生してできた言葉であり、ヒップホップの話し方や髪型、服装を好む白人の姿を指している（Bucholtz 2010:257、筆者訳）。
[4] African American English の略。
[5] 「笑い」を示すネットスラングのこと。

少子化対策の成立における被害者と加害者
―フェミニスト批判的談話分析を用いて

LI HENGCONG

1. はじめに

日本の戦時期において、国民の生殖をより直接的に管理するために、「人口政策確立要綱」、「国民優生法」などの悪名高い法律や政策が作られた。その時期の人口増加政策を代表する「産めよ殖やせよ」という標語の下で、軍国主義政府が日本国民を「人的資源」、つまり物と同じく統制運用し、国民の人権・人格を残酷に踏み潰した（荻野, 2008）。そのため、戦後日本において、戦時期の国家総動員体制下での高圧的な出生促進策への反省や警戒感があり、明示的な人口増加政策は数十年にわたって存在せず、タブー視されてきた（西岡, 2021）。「高齢化社会になっていくのにつきまして、もう少し産めよふやせよをやったらどうかという御議論もあると思います、世の中には。私はそうは思わない。やはり自然な形で子供が生まれていくのが望ましい」という、昭和 58 年（1983 年）に当時の国務大臣であった林義郎氏の国会での答弁がその忌避感を傍証していたと考えられる。

しかしながら、このような状況を一変させたのは、「1. 57 ショック」であった。1990 年、「1. 57 ショック」と呼ばれる少子化傾向が新聞各紙によって報道され、社会問題として認識された。それから四半世紀以上にわたり、エンゼルプランをはじめとして日本政府は巨額の税金を投入して数々の少子化対策を打ち出した。それに伴い、政治家による「女性は産む機械」ととれる公的性差別発言や保健教材を通じて高校生たちに妊娠の圧力をかけるなど、生殖に関する異様な動きも数多く現れた。

多くのフェミニストが国民の生殖に影響を与えようとしている国に対して極めて慎重な態度を取っている（King, 1998）。従って、今日本の生殖に関する政治界の異様な動きをより深く理解するために、本研究は国会において少子化政策が誕生した瞬間に焦点を当て、そこに女性がどのように位置づけられ、表象されていたのかを詳察することを目的とする。歴史的な原点に戻ることによって、現在の少子化の焦燥感による抑圧的な状況を解明し、打開する一助になることを期待する。

2. 先行研究

少子化の原因と解決策、現在の少子化政策の問題点などの少子化政策自体に関する研究（赤川, 2017；山田, 2020）が蓄積された一方、少子化がどのようにアジェンダ化し、少子化政策がどのように正当化されていたのかに関する研究がまだ少ない。西岡（2021）は少子化政策の形成過程において厚生省官僚制がいかに言説戦略を使って、少子化対策への支持調達に成功したかについて考察した。西岡（2021：237）によると、1989 年版の『厚生白書』は「子ども自身に及ぼす問題」、「社会全体に与える影響」という二つの要素をあげて少子化を社会的な「問題」として捉えた上で、その要因として「出産年齢期の女性人口の減少や晩婚化」などを挙げている。また、稲永（2016）は社説記事にお

ける少子化原因ディスコースに焦点を当て、少子化を引き起こした原因は誰の問題として表象しているかを分析した。結果として、社説記事のオーサーは「(若者の) 女性によって引き起こされる少子化ディスコース」(稲永，2016：72) を選択していることを明らかにした。しかしながら、西岡 (2021) と稲永 (2016) の研究が少子化の問題化と少子化における女性の位置づけについて触れたが、「問題―原因」という構図の下で「少子化―女性」という二つの要素しか取り入れなかったため、少子化が女性の問題として表象されているという結論は全体像を把握していると言い難い。少子化の文脈における女性の位置づけは、国家、国民などの複数の主体との相互関係の中で形成されると考えられる。そのため、本研究は複数の主体を包括的に考え、少子化の政治的な言説における女性の位置づけを捉え直すことを試みる。

3. リサーチクエスチョン

先行研究の知見を踏まえ、本研究は以下のようにリサーチクエスチョンを設定する。

①最初の少子化対策の形成過程において、女性以外にどのような主体が提示され、これらの主体はどのように位置づけられたか。

②これらの主体との相互関係において、女性はどのように位置づけられたか。

4. 研究方法

本研究は Lazar(2007)が提唱したフェミニスト批判的談話分析 (feminist critical discourse analysis、以下は FCDA として略称する) を援用する。FCDA は、ジェンダーによる社会的配置に加担する言語使用にある権力とイデオロギー的な構造を解明するために、批判的談話分析とフェミニズム研究との知見を統合したものである (Nartey, 2024)。FCDA の目的は、異なる文脈やコミュニティにおいて常に自明視されるジェンダー想定や覇権的な権力関係が、複雑で、含意的で、時にはそれほど含意的ではない方法でどのように言説的に生産され、維持され、交渉され、挑戦されるかを示すことにある (Lazar, 2007)。従って、本研究は分析の手順を以下のように設定する：①国会会議録を用いて少子化政策の最初の動きに関わるテクストを収集し、少子化言説にある主体を特定する。②これらの主体に関わる叙述的な名詞、形容詞などといった評価的な属性を表す語彙や、隠喩などの修辞法を詳しく分析し、これらの主体がどのように位置づけられているかを詳しく見ていく。③これらの主体を互いに関係づけて、フェミニズム研究の視点から女性はどのように位置づけられているかを考察する。

5. 研究対象

1990 年 6 月 9 日[1]、当時の人口問題研究所が発表した 1989 年の合計特殊出生率、いわゆる女性が一生の間に出産する子供の数は 1. 57 であることがメディアに取り上げられ、

[1] 具体的な日付について、「6 月 9 日　出生率「1. 57 ショック」、少子化対策の契機に」. 日本経済新聞. 2018－06－08, https://www. nikkei. com/article/DGKKZO31532410Y8A600C1EAC000/ (最終閲覧日：2024 年 5 月 29 日) を参照した。

世間を騒がした。このことは「1. 57 ショック」と呼ばれるようになり、少子化が世間に広く認識されるきっかけでもあった（増田, 2008）。「1. 57 ショック」以来、少子化対策に乗り出した日本政府の初めての施策といえば、多くの論文や書籍には、それが 1994 年 12 月策定された「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（愛称、エンゼルプラン）と記述されているが（山田, 2020；増田, 2008）、実際に内閣府のホームページに掲載されている『令和 4 年版少子化社会対策白書（全体版＜HTML 形式＞）』を確認すると、そうであるように見える。図 1 が表しているように、今までの少子化対策の経緯がすぐ見て取れる。

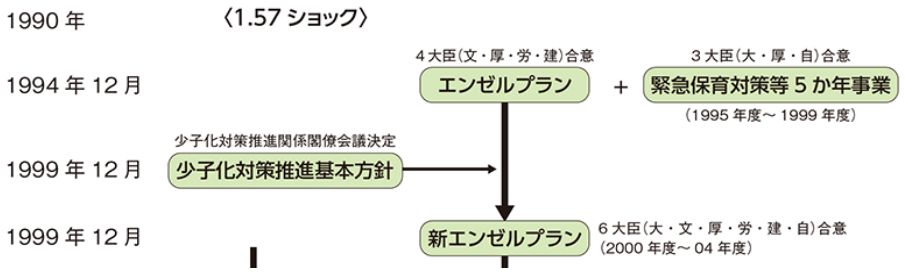

図 1　今までの少子化対策の経緯（令和 4 年版少子化社会対策白書）
出典：内閣府『令和 4 年版少子化社会対策白書（全体版＜HTML 形式＞）』第 2 章第 1 節より

しかしながら、同じく内閣府のホームページに掲載されている『平成 16 年版少子化社会白書（全体版）』の第五章第一節にある今までの少子化対策の経緯を確認すると、「健やかに子どもを生み育てる環境づくりに関する関係省庁連絡会議」の設置が政府最初の動きとして記述されている。図 2 が表しているように、「1. 57 ショック」に続くのは平成 6 年の「エンゼルプラン」ではなく、平成 3 年の「健やかに子どもを生み育てる環境づくりに関する関係省庁連絡会議」である。さらに、「エンゼルプラン」がその横に記載され、背景色によって強調されていないことがわかる。従って、少子化対策において、確かに「エンゼルプラン」は日本政府の最初の本格的な施策であると言えるが、決して最初の動きではなかった。

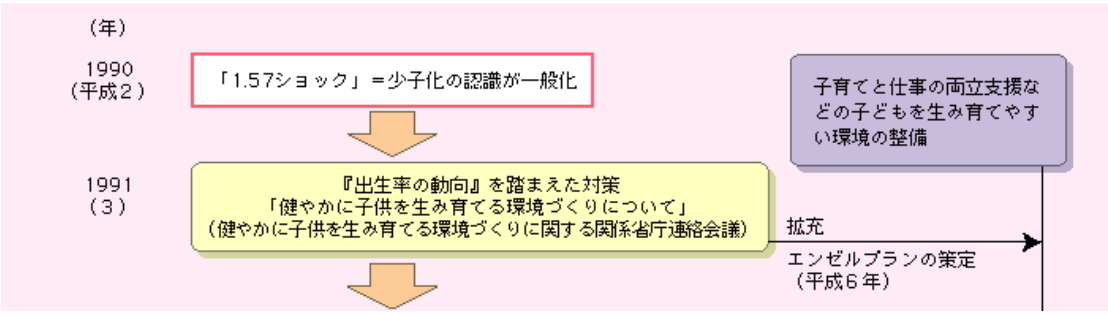

図 2　今までの少子化対策の経緯（平成 16 年版少子化社会対策白書）
出典：内閣府『平成 16 年版少子化社会対策白書（全体版）』第 5 章第 1 節より

人口政策は戦時期の「産めよ殖やせよ」という高圧的な出生促進策への反省や警戒感があって、戦後はタブー視されてきた。しかし、それは人口政策自体が存在しないわけではなく、1990 年までは明示的な少子化対策、すなわち人口増加や出生率上昇を狙いとした人口増加策が戦後の日本には存在しなかったということである（西岡, 2021）。「1. 57 ショック」から「健やかに子どもを生み育てる環境づくりに関する関係省庁連絡会議」の設置までのわずか 2、3 ヶ月の間、社会に深く根付いた人口政策に関するタブー視がやぶられたのは実に興味深い。本研究は、戦後日本人口増加政策に関する初の動きが誕生前夜とも言えるこの 2、3 ヶ月に着目したい。

従って、本研究は国会会議録の検索条件を以下のように設定する：

【検索語】: 女性 OR 子供 OR お子さん OR 一・五七 OR 出生 OR 出産 OR 少産 OR 産む OR 産ん OR 産ま

【対象箇所】会議録情報，本文（発言単位），末尾

【院名】衆議院，参議院，両院協議会・合同審査会等

【開催日付】平成 2 年 6 月 9 日から平成 2 年 8 月 31 日[2]まで

【国会回次】第 118 回から第 118 回まで

検索した結果は、該当会議録：104 件 ／ 該当箇所：562 である。これらの結果を目視検査し、出生率の低下傾向を中心話題にした談話片だけを保存し、約四万字のデータベースを作成した。

6. 分析

6. 1　女性以外の主体に関する特定及び分析

まずは、最初の少子化対策の形成過程において、女性以外にどのような主体が提示され、これらの主体はどのように位置づけられたかを見ていくことにする。

抜粋 1－1

〇高木健太郎君：　…国全体としての子供の数がだんだん減って、二〇〇四年と言われていた、いわゆる老人人口と若年者との数が等しくなってくる年が早まり、そうなってくると国の将来が危ないというようなことをいろいろ言われておりまして…

（第 118 回国会　参議院　文教委員会　第 5 号　平成 2 年 6 月 12 日）

抜粋 1－1 を見ると、「少子化」は「国の将来」を脅かす存在として提示され、つまり「厄災」のような存在として位置づけられたと考えられる。そして、文の終わりの部分において「いろいろ言われておりまして」をつけることによって、自分の見解ではなく、

[2] 「健やかに子どもを生み育てる環境づくりに関する関係省庁連絡会議」の設置された日付については内閣府『平成 16 年版少子化社会対策白書（全体版）』を参照し、8 月最後の日にした：
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12772297/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/html_h/html/g1510010.html（最終閲覧日：2024 年 5 月 29 日）

他者からの情報であることを強調した。即ち、この見解には責任を負わないということをほのめかしていると言えるだろう。また、なぜ「国の将来が危ない」かについての説明がなく、逆に言えば、この社会現象が国の将来に確実に悪影響を及ぼすという考えが、言うまでもないほど明白な前提として存在しているからだと考えられる。

抜粋 1－2
〇津島国務大臣：　…今の一・五七という出生率は非常に深刻な問題をはらんでいると思っております。これによりまして、まず、これから生まれてこられる子供さん方の成長にもいろいろな問題が生じます。遊び友達がいない、兄弟がいない、かぎっ子になるというような問題がまずあるわけであります。それから高齢者扶養の負担の増大、労働人口の不足等経済全体について大きな影を落とすことになると思います…
（第 118 回国会　衆議院　社会労働委員会　第 11 号　平成 2 年 6 月 14 日）

抜粋 1－3
〇日笠委員：　…そこで、きょう委員長にお願いを申し上げて、私がつくりました資料、皆さんお手元に行っているかと思いますけれども、「出生率改善」というふうにしました。向上とすると、戦前の産めよふやせよ、子は国の宝みたいに思われてはいけませんので。しかし、この出生率がある程度改善しないと、高齢化社会でのいわゆる社会保険料の負担の重荷であるとか労働力の問題であるとか活力ある国であるとか、いろんな問題が出てくるわけですね。
（第 118 回国会　衆議院　税制問題等に関する調査特別委員会　第 6 号　平成 2 年 6 月 15 日）

そして抜粋 1－2、抜粋 1－3 は「労働人口の不足」、「労働力の問題」を用いて「国」に対する悪影響を具体化した。これは主に国の社会全体の視点、いわゆる国という想像共同体の視点で考えていることが見て取れる。また、抜粋 1－3 の「活力ある国」は隠喩の手法を使い、国家という制度的なものを遺伝－生物的な実体として表象している（Kotzeva&Dimitrova，2014）。言い換えれば、少子化は国の活力の低下、いわゆる国の「死」に繋がっていると暗黙に提示していると考えられる。よって、「国」が被害の主体として表象され、「被害者」として位置づけられたと考えられる。

また、抜粋 1－3 の「戦前の産めよふやせよ、子は国の宝みたいに思われてはいけませんので」というような、人口増加策に関するタブーを配慮した動きがまだ窺えるが、それはあくまでタブーを避けるための言葉遊びであり、「出生率向上」を「出生率改善」にすれば大丈夫という考え方は、タブーの効果がすでに弱まったのを意味していると考えられる。

抜粋 1－4

○勝木健司君：　…出生率の低下は、単に人口問題であるだけでなく、雇用、年金等を初めといたします経済問題でもあります。そして、何よりも我が国の活力にかかわる最も基本的で、かつ重大な問題であると思いますが…
（第 118 回国会　参議院　本会議　第 16 号　平成 2 年 6 月 18 日）

抜粋 1－5
○国務大臣（海部俊樹君）：…最初に、出生率の低下は児童自身の成長に対してのみならず、雇用、年金の問題、社会経済全体の活力の低下など、我が国の将来にさまざまな問題を投げかけるものとして問題提起がございました。
（第 118 回国会　参議院　本会議　第 16 号　平成 2 年 6 月 18 日）

しかしながら、「国が危ない」という大義名分は抽象的であり、国の活力、社会経済全体の活力の低下、労働力不足といった問題も国民の日常生活から離れている概念であるため、これだけで少子化政策を成立させるのはまだ不十分だと考えられる。

Maroney（1992）によると、個人と国家との焦点には根本的な違いがあり、そのギャップが予測の影響を個人化にすることによって克服できる。そのため、抜粋 1－2 の前半部分の「子供さん方の成長」、「高齢者扶養の負担の増大」、抜粋 1－3 の「社会保険料の負担の重荷」、抜粋 1－4 と抜粋 1－5 の「児童自身の成長」、「雇用」、「年金」という言葉遣いは一気に国民の日常生活に迫り、国民の関心を喚起しようとしていると考えられる。即ち、「国」のみならず、「国民」を含めて被害者として表象しようとしている様子が窺える。また、ここでの三つの表現は興味深い。「子供さん方の成長」に最も気になるのは有子家庭だろう。「雇用」に最も気になる方は働いている若者、そしてまだ定年退職していない中高年層だろう。「年金」に最も気になる方は言うまでもなく高齢者だろう。言い換えれば、この三つの表現はほぼ子供を除いた国民全体を対象としていたと考えられる。

以上分析から見れば、「1. 57 ショック」からすぐに、少子化傾向が国だけの問題ではなく、国民全体にも悪影響を及ぼす「非常に深刻な問題」として語られるようになり、「厄災」として位置づけられた。即ち、少子化に対して誰も傍観者でいられないという現実は、少なくとも国会の場で構築された。これによって、国家、そして国民は「被害者」に位置づけられ、国から国民までの総動員体制の一部が整えられたと考えられる。

6. 2　女性に関する分析

国から国民まで全員が被害者であることは、必ずしも国の内部に加害者が存在せず、害物が環境あるいは物であることを意味しない。本章は少子化において女性がどのように位置づけられたかを考察する。

抜粋 2－1
○津島国務大臣：　まず、どういう原因が絡んでいるかということをしっかりとみんなで把握し、認識しなければならないと思いますが、私は、まず子供を産んでいただく女

性の方々の晩婚化ということ、これはいい悪いは別でございますよ、事実として非常に進んでいるということが第一。それから、結婚された方について社会的な、そして経済的ないろいろな要因、雇用であるとか子育てのためのコストであるとか教育に対する心配であるとかいうことがやはり住宅問題等とも相まちまして、何となく希望している子供さんの数よりも少ない数にとどまってしまうという結果が生まれている。
（第 118 回国会　衆議院　社会労働委員会　第 11 号　平成 2 年 6 月 14 日）

少子化を起こす社会構造的な要因が背景化されている。例えば、抜粋 2－1 において、「社会的な、そして経済的ないろいろな要因」の補足説明として、「雇用」、「子育てのためのコスト」、「教育に対する心配」、「住宅問題」などの要因があげられたが、これらの要因は経済的要因に偏っていることが見て取れる。即ち、社会的な要因についての説明が全くされなかった。このように、具体性を欠く表現を使用することにより、少子化を引き起こす社会構造を不明瞭なものとして表象することが可能になると考えられる（稲永, 2016）。

また、Maroney（1992）によると、住宅、子どもの教育などの要因が出生の「阻害」として見なされる限り、生殖自体が普遍的で歴史を超えた欲求としてそして当然なものとしてされており、子どもを産むのが自然な状態であるという前提が暗黙に含まれている。

抜粋 2－2
○保利国務大臣：　…やはり住宅事情でございますとかあるいは結婚年齢が少し上がってきたとか、いろんな要素が絡み合ってこういう現象になってきたと思っております。
（第 118 回国会　衆議院　文教委員会　第 14 号　平成 2 年 6 月 13 日）

抜粋 2－3
○川俣委員：　…言ったか言わないかわからぬけれども、女が余り高等教育を受けるから子供を産まなくなったとか言ったとか言わないとか、そんな問題じゃない。現実こうなったのだから、今大臣が最後に言った分、早急に関係官庁が集まってやらなければならないと思うので、あえてそれを強く要求しておきます。
（第 118 回国会　衆議院　社会労働委員会　第 11 号　平成 2 年 6 月 14 日）

抜粋 2－4
○加藤（栄）政府委員：　いろいろと原因につきまして御論議がございます。合計特殊出生率の低下の原因として主に考えられますのは、出産適齢期、二十歳から三十四歳が主力でございますけれども、この年齢に入る女子人口が次第に減少してまいりました。一時、戦後のベビーブームの女子の方がこの二十ないし三十四歳の年齢層を通過していかれ、その後減少している。それから、第二が女性の結婚年齢の上昇、いわゆる晩婚化でございます。これは国際的に見ましても高いわけでございまして、六十三年度でござ

いますと、女性の平均で初婚年齢が二十五・八歳になっております。さらに、養育費等の負担でありますとか育児にかかる肉体的、精神的な負担感というものを強く今の方々が、若い方々が感じられる、あるいは住宅事情というものを障害と感じる度合いが強い、こういうような心理的な要因でございますか、あるいは物理的な要因、そういうさまざまなものが考えられるところでございます。
（第 118 回国会　衆議院　社会労働委員会　第 11 号　平成 2 年 6 月 14 日）

一方で、少子化の原因は「女性」にあることが強調されていた。抜粋 2－2 において、「結婚年齢」という概念を主語にすることによって、晩婚化する社会的行為者を特定せずに、曖昧にしたが、抜粋 2－1、抜粋 2－3、そして抜粋 2－4 は少子化の要因を女性の晩婚化、女性の高学歴化に帰結させた。また興味深いのは、まるで女性たちの反論を招くことが事前に知っているように、すぐ後ろに「事実として」、「現実こうなったのだから」などの表現を加えて自分の言説を正当化しようとしている様子が窺える。さらに、抜粋 2－1 では、「女性の方々」という表現を使い、晩婚化を女性たちの一致した傾向として表象していることにより、晩婚化を女性と強く結びつけた。

しかしながら、結婚はそもそも二人のことである。厚生労働省人口問題研究所（1988）および厚生労働省人口問題研究所（1993）を確認したところ、日本の平均初婚年齢は 1970 年代半ば以降、女性だけでなく、男女とも上昇の一途を辿った。「女性の方々の晩婚化」や「女性の結婚年齢の上昇、いわゆる晩婚化」など、「女性＋晩婚化」のような構文によって女性が能動的に晩婚を選び、男性が早く結婚したいが女性はそうしたくないと表象することが可能になったと考えられる。つまり、男性は晩婚化という「罪」において、不在であった。

また、少子化を「女が余り高等教育を受けるから子供を産まなくなった」や「女子人口が次第に減少」に帰結させるのが、女性における知と身体の二元論的対立を含意しているのみならず、江戸時代から伝わる男尊女卑の封建思想からの「女に学問は不要」という考え方（木村，2010：44）や、女性を単なる「産む性」に還元する考え方が見え隠れする。

以上の分析から見れば、環境・ものが阻害要因として語られる一方、女性は能動的に少子化という「厄災」を招いた「加害者」として位置づけられたと言えるだろう。従って、少子化対策の文脈において女性は「被害者」・「加害者」として語られるようになった。言い換えれば、女性は国民として少子化の「被害者」であると同時に、少子化に加担した「加害者」であるという、二重身分の形で少子化対策の総動員体制に組み込まれていると考えられる。この過程において、男性は国民の「被害者」であると同時に、「加害者」としての姿が巧妙に隠され、暗黙の裡に「完璧な被害者」として位置づけられていたと考えられる。

7. 結語

本研究は「1. 57 ショック」以降、少子化に関する最初の政策形成過程において、どのような主体が提示され、これらの主体がどのように位置づけられていたかについて分析を行った。これらの主体の相互関係を包括的に考えた上で特に女性がどのように位置づけられていたかについて精緻に考察した。その結果、「女性」以外にも「少子化」、「国」、「国民」といった主体が提示されたことがわかった。また、これらの主体の相互関係を包括的に考えたところ、「国」、「国民」が「被害者」として位置づけられ、それに対して「女性」は「少子化」という「厄災」を招いた「加害者」として位置づけられていたと考えられる。つまり、少子化に関する最初の政策形成過程において、「少子化・女性―国家・国民」という対立に見えるような構図が作り出され、そこに男性の姿が消されたことが明らかになった。

これらの分析結果によれば、少子化政策の成立において、女性に罪の意識を押し付け、抑圧しようとする異様なイデオロギーが既に内包されたと言っても過言ではない。本研究の結果は、現在の少子化の焦燥感による政治界の異様な動きや抑圧的な状況を理解する一助になると期待する。

参考文献

King, L. (1998)“France Needs Children”: Pronatalism, Nationalism and Women's Equity. *The Sociological Quarterly*, 39(1)pp.33-52.

Kotzeva, T., & Dimitrova, E. (2014) Nationalism and declining population in Bulgaria after 1990. *Comparative Population Studies*, 39(4).

Lazar, Michelle M.(2007) Feminist Critical Discourse Analysis: Articulating a Feminist Discourse Praxis. *Critical Discourse Studies*, 4（2）, pp.141-164.

Maroney, H. J. (1992) “Who has the baby?” Nationalism, pronatalism and the construction of a “demographic crisis” in Quebec 1960–1988. *Studies in Political Economy*, 39(1), pp.7-36.

Nartey, M. (2024)Women’s voice, agency and resistance in Nigerian blogs: A feminist critical discourse analysis. *Journal of Gender Studies*, 33(4), pp.418–430.

赤川学（2017）『これが答えだ!少子化問題』筑摩書房.

稲永知世（2016）「メディア英語研究における批判的ディスコース分析（CDA）の有効性」『英文学論集』24, 48−74.

荻野美穂（2008）『「家族計画」への道 ： 近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店.

木村涼子(2010)『「主婦」の誕生 ： 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.

厚生労働省人口問題研究所（1988）『昭和 62 年第 9 回出産力調査（結婚と出産に関する全国調査）第 I 報告書　日本人の結婚と出産』https：//www. ipss. go. jp/syoushika/bunken/DATA/pdf/J08582. pdf(最終閲覧日：2024 年 5 月 29 日）

厚生労働省人口問題研究所（1993）『平成 4 年第 10 回出産力調査（結婚と出産に関する全国調査）第 I 報告書　日本人の結婚と出産』

https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/DATA/pdf/J21610.pdf(最終閲覧日：2024年5月29日)
西岡晋（2021）『日本型福祉国家再編の言説政治と官僚制 ： 家族政策の「少子化対策」化 』ナカニシヤ出版.
増田雅暢（2008）『これでいいのか少子化対策 ： 政策過程からみる今後の課題』ミネルヴァ書房.
山田昌弘（2020）『日本の少子化対策はなぜ失敗したのか? ： 結婚・出産が回避される本当の原因』光文社.

制度的場面を持ち込んだインタビューにおける「フレーム」の変容過程
―教員–学生間の雑談開始・終了部に着目して―[1]

山本　由実

1. はじめに

近年、社会言語学を含む諸分野では、インタビューは話し手と聞き手のアクティブな相互行為であるという見方 (Goodwin, 1981; Holstein & Gubrium, 1995 他) が主流になっており、本研究もその立場をとる。このような見方は、聞き手が話し手から必要な情報を取り出すのではなく、「今–ここ」で行なわれるインタビューの場は両者によって協働的に構築されるという認識に立つものである。

実際にインタビューを行なってみると、予定していた話題だけでなく、時には雑談や笑いが差し挟まれたり、インターネットを介したインタビューであった場合には通信環境や双方が身を置く環境を要因とする中断が起こったり、またそれらにまつわる会話がなされたりするなど、そこには聞き手と話し手が互いに影響を与え合う多様な営みが包含されていることがわかる。また、インタビューの聞き手と話し手の関係性も、インタビューの内容や進行に影響を与えていると考えられる。

本稿は、大学教員と学生とのオンラインインタビュー・データのうち、インタビューの趣旨に沿わない話題 (雑談) を話し手である学生の側から持ちかける場面に焦点を当て、「フレーム」(Bateson, 1955; Goffman, 1974) の変容がどのように生起しているのかを詳察するものである。インタビューでは、参加者たちの属性から、友人同士の会話とは異なる性質のやりとりが繰り広げられていることが見てとれた。このような授業という制度的場面[2]が持ち込まれたインタビューにおいてどのような相互行為が行なわれているのかを明らかにすることを本稿の目的とする。

2. 研究の理論的背景とリサーチクエスチョン

まず、本稿で扱うインタビューの性質について確認する。高木・細田・森田 (2016) は社会言語学的インタビューについて「参加者は『研究者(社会言語学者)が何らかの目的で研究協力者と面談をしている場面』という了解の下に相互行為を進めるはずであり、日常会話と一切区別することなく扱うことには、慎重になるべき」(p.12)であると言う。つまり、表層的にはカジュアルな会話のように見えていたとしても、制度的な場面の特徴が基部として存在していることを認識しておく必要があるということであろう。とりわけ、本稿で扱うインタビュー・データは社会言語学的インタビューであることに加えて、聞き手と話し手が大学教員–学生であり、双方がそれを知った上で行なわれている。このような状況下でのインタビューは制度的場面の性格を帯びたものであることが予想されるため、話し手から雑談を開始することは容易ではないと考えられる。

次に、本稿の分析の枠組みとなる「フレーム」にまつわる概念を押さえておく。本稿では「フレーム」(Bateson, 1955; Goffman, 1974) を援用し、インタビュー内で本題とは違う話題、つまり雑談が発生した部分に焦点を当て分析する。「フレーム」とは、会話などの参加者たちが「ここで起こっているのは何か」(Goffman, 1974: 8) を理解する解釈枠組みであり、参加者たちはその枠組みに基づいて振る舞う。本稿では、「本題のフレーム」が「雑談のフレーム」に、「雑談のフレーム」が「本題のフレーム」に変容する過程を見ていく。「フレーム」が変容するきっかけは、常に明示

的に示されるわけではなく、日常の中では明確に言語化されないことが少なくない。通常われわれは、方言の使用や発話スタイルの変化、韻律的特徴などによるコンテクスト化の合図 (Gumperz, 1982) を読み取り、相互行為のフレームを解釈する。Gumperz (1982) によると人々が行う基本的な解釈の方向づけは、「内容と表面的なスタイルとの間の慣習化された共起期待に基づく会話の暗示」(p.131)によって行なわれると言う。つまり、言語的な要素とその発話の仕方やしぐさのコンビネーションから、今ここでどのようなフレームに移行しつつあるのかということを瞬時に判断し、調整を行なっているということである。

本稿では、制度的場面の様相を帯びたインタビューにおいて「本題のフレーム」から「雑談のフレーム」へ「雑談のフレーム」から「本題のフレーム」へと変容する際の聞き手と話し手の相互行為を分析する。そのため、本稿では 2 つのリサーチクエスチョンを設定する。①話し手起点の「雑談のフレーム」はどのように開始／終了されるのか、を明らかにする。その上で、②相互行為上のストラテジーとしてどのような言語／非言語行為、及びメタコミュニケーションが用いられているのかを検証する。

3. データの基本情報と分析の手法

本研究では、2021 年度より日本人大学生英語学習者 16 名に継続的にインタビューを行なっており、研究協力者自身の英語学習経験にまつわる語りを収集している。本稿では、そのうちの 3 名(H、S、Y)と研究者 I との個別インタビューからの抜粋を用いる(表 1 参照)。研究協力者は大学共通のインターネットプラットフォームにて募集した。本研究のデータ収集を始めた 2021 年度はコロナ禍にあり対面でのデータ収集が憚られる時期であったので、オンライン会議システム Zoom を使って研究協力者に個別にインタビューを実施することになった。データの形式を揃えるため、2 年目以降も同様の方法を採用している。

それぞれのデータの研究協力者と研究者 I との関係は次のとおりである。データ 1 の研究協力者 S とは本研究の初回 Zoom インタビューで初めて顔を合わせた。抜粋は初回インタビューからちょうど 1 年後に行われた 2 度目のインタビューの終盤部分である。初回インタビューは双方笑顔を見せながら和やかに行われ、2 度目のインタビューでもスムーズに会話が進んでいった。データ 2 の H は通算 2 学期間、I の担当する授業を受講していたが、最初の 1 学期間(春学期)はコロナ禍のオンライン授業(学生はカメラオフ)であり I は H と画面越しでも対面したことは無かった。翌年秋学期、H が I の担当授業を履修し初めて顔を合わせることになる。履修生が数名の対面授業であり、授業後にプライベートの話もしていたためラポールを築くことができていた。データ 3 の Y は、秋学期に I の担当する必修の英語科目(履修生 28 名)を対面形式で履修しており、同じ

表 1：データ情報

データ	収録日	学年・性別	I の授業担当の有無	抜粋箇所 /収録時間
データ 1: S-I 逆に質問というか	2023.3.14 (2 回目)	2 年・男性	無	44:05-51:58 /0:53:47
データ 2: H-I イケメンの話	2023.3.22 (初回)	2 年・男性	有・2 学期間(オンライン・対面各 1 学期)	2:59-5:46 /1:04:49
データ 3: Y-I 勉強方法とかは知りたいです	2023.2.14 (初回)	1 年・女性	有・1 学期間(対面)	16:07-16:56 /0:48:04

年度終わりの休暇中にインタビューに応じてくれた。秋学期の授業はインタラクティブな形で行われていたため、I と履修生たちは授業中、及び授業前後で言葉を交わす機会が多く、Y ともラポールを築けている状態であった。

本研究は研究者 I がインタビューに参加し、研究協力者との相互行為を分析するものであり、当事者研究に当たる。当事者研究は客観性が乏しいとの声もあるが、薛 (2024) が指摘するようにインタビュアーが分析対象者とどのような関係にあろうとも、インタビュアーは客観的ではあり得ない。そうであるなら、当事者であるが故に持ち得る情報も有効活用することで解像度の高い分析を目指すべきであると考える。その際、桜井 (2002) が主張するように、インタビュアーは一定の構えを持っている主観的な存在として自覚した上で分析を行うべきということは常に念頭においておくべきであろう。

分析の手法としては、フレーム変容のきっかけとなるコンテクスト化の合図を特定し、言語／非言語行為を詳しく観察する。発話の中で用いられる語彙、韻律的特徴、笑い、間などのパラ言語と併せて、目線、身体的動作などを含めたマルチモーダルな分析を行なう。また、それらがどのようなメタコミュニケーションとなっているのか考察する。

4. データ

4.1 インタビュー終盤の質問

データ 1 はインタビューの終盤で、当初予定していた質問を全て聞き終わり、他に言い忘れたことや付け加えたいことがあるか、と研究者 I が S に尋ねるところから始まる。

データ 1: 逆に質問というか

```
1.      I:      わかりました(1.0)ありがとうございます
2.      S:      °うん°((軽く頷く))
3.      I:      なんか(.)あの:言:い(.)忘れたこととか
4.              なんか(.)付け加えておきたいこととかあり(.)ます↑か
5.      S:      [や((目線を上に向け体を後方に移動する))(3.0)
6.      I:      [((笑顔))
7.      S:      無いん[ですけどしかも(1.0)
8.                    [((体はそのままで目線を画面に戻して))
9.      I:      ((笑顔で数回頷く))
10.     S:      無いんですけどなんか[逆に質問というか:=
11.                                 [((元の位置に戻り画面の方を見て))
12.     I:      =あ(.)はいはい=
13.     S:      =[°えっ°と::なんか僕みたいにその中途半端に英語ができる人間が:
14.              [((頭は正面を向き目線は下に向けて　-15 行目まで))
15.     I:      °うん°
16.     S:      あの(.)こう話す(.)ようになる(.)ために(.)
17.             なんか必要な(.)ステップっていうのは
18.             [やっぱり(1.0)何が(.)重要やと思いますかその(.)
19.             [((目線を画面に向ける))
```

20.　　[別にな具体的な学習(.)方法とか学習教材でもいいですし:=
21.　　[((目線を上に向け体を後方に移動する -26 行目まで))
22.　I:　=うん((数回細かく頷く))
23.　S:　なんか(.)なんかもうちょっと
24.　　抽象(.)ふわっとして((両手で何度か大きく丸を描く))
25.　　なんかこういうのが大事なんじゃないっていうような
26.　　ふわっとした(.)のでも(.)いいんですけど(.)なんか(.)
27.　　[あったら教えていただきたいです(.)
28.　　[((目線を画面に向ける))
29.　I:　あ::h@喋るんですよね((右手で頬を掻く))
30.　S:　そ喋る:みたいな時に＝
31.　I:　=うんうんうん

中略　(32-127 行　英語で話せるようになるためのコツについての話)

128.　S:　はい(.)
129.　I:　うんうん
130.　S:　むっちゃ(.)参考になりました
131.　I:　良かったで¥す¥@((笑いながら数回頷く))
132.　　うんうんうん
133.　　なんかね(.)学習サイト(.)も(.)使い(.)つつ
134.　　まこんなのも見たら(.)いいんじゃないかな
135.　S:　°はい°((短く頷く))
136.　I:　でした [@
137.　S:　　[°ありがとうございます°((軽く頭を下げる))
138.　I:　¥以上でございます ((笑いながら数回頷く)) 良かったです¥
139.　　はい(.)はい良いですかなんか他には
140.　S:　¥はいすいませんなんか質問してしまって(.)あの:¥((両手を合わせる))
141.　I:　いやいやいいですよいいですよ全然聞いてください
142.　　こちらこそほんとにありがとうございます
143.　S:　ありがとうございます

I の「なんか(.)あの:言:い(.)忘れたこととかなんか(.)付け加えておきたいこととかあり(.)ます↑か」(3-4 行目)という質問に対し S は、「や」(5 行目)と短く声を発し、目線を上の方に向け体を後方に移動しながら何か考えている様子を見せる。S は、「無いんですけど」(7 行目)と「無い」と言いながらも逆説の接続詞「けど」と続け、さらに「しかも(.)無いんですけどなんか逆に質問というか:」(10 行目)と二度「無い」を繰り返した後、英語学習についての質問を切り出す。この間、S の身体は落ち着きなく動いている(グレーの網掛け部分)。

中略後の I が S の質問への回答を終えた箇所を確認すると、S は「むっちゃ(.)参考になりました」(130 行目)と I の回答を肯定的に評価し、この話題が終わったことを受け止める発話をする。

それを受けて、I も「でした@¥以上でございます ((笑いながら数回頷く))良かったです¥」(136、138 行目)と冗談めかして笑いながらこの話題を一旦終了させる。しかしここでIはさらに続けて、「はい(.)はい良いですかなんか他には」(139 行)と更なる質問が無いか尋ねるのだが、S が「¥はいすいませんなんか質問してしまって(.)あの:¥」(140 行目)と両手を合わせてゴメンというジェスチャーを作りながら笑顔で言い、雑談(S の I への質問)は終了する。S は、インタビューという自分が回答する側であるという原則を逸脱したことについて、言語／非言語行為両方で謝罪の意を示した。

4.2 インタビュー序盤の雑談

データ 2 は、H と I とのインタビューの冒頭である。Zoom の画面共有をしながら誓約書の読み合わせを行なった後、インタビュー映像を学会等で使う場合に顔部分に画像処理をしてほしいかどうかを確認している場面から始まる部分である。

データ 2: イケメンのデータ

1. I: 顔:モザイクかけた方がいいです↑か
2. H: いや(.)別に(.)特に大丈夫ですよ
3. [(　　)
4. I: [@そしたらちょっと
5. や:山本さんイケメンの:あのデータ(.)使ってるな:
6. ((研究誓約書書類の画面共有を切る))
7. って言われるかもしれないけど
8. H: [((笑顔で少し下の方を向いている 5.0 秒))
9. I: [@
10. H: え(.)これあれですか全然関係ない私語とかしてもいんです↑か
11. I: いいですいいですよ全然してもいいです
12. H: イケメンのネタで言ったら昨日(.)あの:歩いてたら
13. I: うん
14. H: すぐ近くの((外を指差して))美容室に
15. カットモデルやりませんかって声かけられて:
16. I: ↓は:

中略（17-63 行 美容院のカットモデルに勧誘された経緯とそれに関連する話）

64. H: いや終わりですはい(.)この話終わりましょう
65. I: @@[@
66. H: [°すみません°((笑顔))
67. I: この話ばっかり((笑顔))はい(.)[いえいえいいですよ
68. H: [((咳払いする))
69. I: え:とね(.)う:ん@¥何から始めよか¥
70. ま:ありがとうございます((手を前に出して))

71.　　え:今そのま 2 か月:ていう:終わりましたよね(.)授業終わってからね
72.　H:　はいはい 2 ヶ月ぐらいちょうど 2 か月ぐらいですね

I は 4-5、7 行目で「@そしたらちょっとや:山本さんイケメンの:あのデータ(.)使ってるなって言われるかもしれないけど」と「イケメン」というフォーマルな場にふさわしくない語で H を形容し、もし I が学会や研究会でこのデータを使ったらという仮説のシナリオ (Georgakopoulou,2001; 秦, 2020 他) を用いて冗談を言う。それに対し H は下を向いて笑いを堪えきれない様子である。それが 5.0 秒ほど続いた後、H が「え(.)これあれですか全然関係ない私語とかしてもいんです↑か」(10 行目)と断り、I の了承を得てから、「イケメン」にまつわる自身の体験談を始める。

一連のエピソードを話し終えた中略後、H が「いや終わりですはい(.)この話終わりましょう」(64 行目)と話題を終わらせる。H の笑いながら「すみません」(66 行目)という軽い謝罪に I が「いえいえいいですよ」(67 行目)と返答し、69 行目からインタビューの本筋に戻っていく。

4.3 インタビュー中盤の質問

データ 3 では、データ 1 の S と同様に、話し手である学生から I に英語の学習方法についての質問がなされるが、それが生起するのはインタビューの中盤である。データ 3 の直前では春休み中の英語学習が話題になっており、Y が TOEIC 対策を始めたことを語る。その後、I が娯楽として英語に触れていることがあるか尋ね、Y が映画を観たいと言ったことをきっかけに I が映画にまつわる話をしていた。

データ 3: 勉強方法とかは知りたいです

1.　I:　ま(.)何の話をしてたんや(.)あ勉強:の話か
2.　°う:ん[はいはい°
3.　Y:　　[((頷く))
4.　I:　ま(.)あの時[あると思うんで(.)春休みに(.)でも(.)観てください
5.　Y:　　[((手を口元に持ってくる))
6.　I:　なんか観たいなっ[と思ってる映画はある↑ん
7.　Y:　　[あ((視線は情報に向け人差し指を唇に当てる))
8.　いや:(1.0)あでも先生勉強(.)方法(.)とか(.)は知りたいです(1.0)
9.　I:　うぇ
10.　Y:　な::え:と例えば TOEIC する:知りたいというか
11.　TOEIC:に向け(.)て:とか:=
12.　I:　=うんうんうん
13.　Y:　あとは喋れるようになるにはどんなこと°をしたらいいか°
14.　I:　あ[ぁ:はいはいはいはい
15.　Y:　[(　)
16.　I:　まあそれは別の:やつやね TOEIC はとりあえずなんか
17.　問題集(.)攻略みたいなやつ(.)を一冊買ってみて:

ここでの Y はコンテクストを無視して自由に発言しているように見える。I は「春休みに(.)で

も(.)観てください」(4 行目)「なんか観たいなっと思ってる映画はある↑ん」(6 行目)と直前に話していた映画について言及したり質問したりしている。しかし、Y はそれには答えず、視線を上に向け人差し指を唇に当て、「あ」(7 行目)と思いついたように、「いや:(1.0)あでも先生勉強(.)方法(.)とか(.)は知りたいです」(8 行目)と新しい話題を始める。それに対して I は「うぇ」(9 行目)とまぬけな声を発し、Y が I の質問への答えでなく、新たな話題を提供したことに驚いたような様子を見せる。I の質問は無視された形になっているが、I はそのことには言及せず、「うんうんうん」(12 行目)「あぁ:はいはい」(14 行目)と返答し、16 行目から Y の質問の回答を始める。この話題の終了部分については考察で述べることとする。

5. 考察

本稿ではここまで、3 つのデータにおけるフレーム変容を含むやりとりを見てきた。ここで、2 章で掲げたリサーチクエスチョンへの回答を示す。データごとに①話し手起点の「雑談のフレーム」はどのように開始／終了されるのか、②相互行為上のストラテジーとしてどのような言語／非言語行為、及びメタコミュニケーションが用いられているのか、について議論する。

データ 1 では、I が「なんか(.)あの:言:い(.)忘れたこととかなんか(.)付け加えておきたいこととかあり(.)ます↑か」(3-4 行目)と S に発言のターンを渡したということと、質問が一通り全て終わっているという共通認識が S 主導の「フレーム」移行を促している。このインタビューが 2 回目であり、前回よりも打ち解けているということもあるだろう。S の「なんか逆に質問というか:」(10 行目)がコンテクスト化の合図となり、I が「あ(.)はいはい」(12 行目)と応じたことで I が「フレーム」の移行を許可し、「本題のフレーム」から「雑談のフレーム」への変容が生じた。この「雑談のフレーム」が終了するのは、I の「でした@¥以上でございます ((笑いながら数回頷く))良かったです¥」(136、138 行目)というまとめの言葉であるが、I はさらに続けて、「はい(.)はい良いですかなんか他には」(139 行)と言い、新たなフレームの開始が仄めかされる。これに対して S が、「¥はいすいませんなんか質問してしまって(.)あの:¥」(140 行目)と謝罪のジェスチャーと共に笑顔で言い、一連の「雑談のフレーム」は S のターンで終了する。

データ 1 の S の 5-28 行目にかけての新しい話題を持ち出す箇所を再度確認すると、韻律や速度の変化、ポーズなど多様なパラ言語を用いて表出されている。Jones (1990) はこのような流暢ではない話し方は日本人の会話に見られるコンフリクト[3]を避けるストラテジーであると指摘している。ここで S が新しい話題を持ち込むことは深刻なコンフリクトという程ではないが、多少の配慮の必要性が感じられる場面であることは予想できる。S の発話では、3 秒間の沈黙(5 行目)や発話内の細かいポーズ、「えっと」(13 行目)、「なんか」(10, 13, 17, 23, 25, 26 行目)などに表れる非流暢性が見られる。また、身体的な動きを見てみると、S は体を前後に移動したり、目線を外したり画面に戻したりという絶え間ない動作(グレーの網掛け部分)が見られる。対照的に、中略部分で I の回答が始まると、S の頻繁な身体の動きは無くなり、コンフリクトを回避したことにより落ち着きを取り戻したことが窺える。

続いてデータ 2 では、I の「@そしたらちょっとや:山本さんイケメンの:あのデータ(.)使ってるなって言われるかもしれないけど」(4-5、7 行)という I の笑いと冗談がコンテクスト化の合図になり、H の「え(.)これあれですか全然関係ない私語とかしてもいんです↑か」(10 行目)という問いかけ、及び I の許可で「雑談のフレーム」が開始される。この雑談のフレームの終わりを見てみると、イケメンのエピソードを一通り語り終わった 64 行目で「いや終わりですはい(.)この話終わ

りましょう」と H が自ら話を終了させている。それに対して I は笑いで応じ、インタビューの本筋に戻っていく。自ら始めた「雑談のフレーム」であったが、インタビューの本題から逸脱していることを認識しており、また、インタビューが始まったばかりであるため、その目的を達成しなくてはいけないという意識からこのようなやりとりになっていることが窺える。

データ 2 で注目すべきはフレーム開始前の 5.0 秒の間(8 行目)である。この間、H は笑顔で下の方を向いているが、雑談を始めて良いか逡巡しているのだと思われる。I の言動(4-5、7 行)からコンテクスト化の合図を受け取ったことに加え、二人にとってイケメンの話は過去にも行なわれたことがあり、ラポールを想起させるものである。H はこれらのことから雑談が許容されると判断し、イケメンにまつわるエピソードを提供することにしたのだろう。ただやはり、初回インタビューの冒頭という比較的緊張感の高い場面ということで、その判断に少し時間がかかっているのだと推測できる。高梨 (2016) はこの雑談に見られるような「遊び」に参加する行為について、「相手のユーモアの理解・評価を前提とし、積極的に関与して自己表出することにより、相手の肯定的面子を重んじるだけでなく、自らの肯定的面子も伸長される結果をもたらしている」(p.132-133) ものであると言う。H 主導の「本題のフレーム」から「雑談のフレーム」への移行とそれに先立つ I の冗談は、冗談を言える間柄であることを伝え合うメタメッセージとして機能していると言える。ただ、I が「教員」であり、このインタビューの主導権を持つ者であることから、「雑談のフレーム」開始の発話の言語形式としては「してもいいですか」と「許可」を求める形になっていると考えられる。

データ 3 での「雑談のフレーム」は、7 行目の Y の「いや:(1.0)あでも先生勉強(.)方法(.)とか(.)は知りたいです」(8 行目)という一見唐突な発話がコンテクスト化の合図となり、開始される。この発話は唐突に聞こえるが、I は 9 行目で「うぇ」と驚いた様子を見せるものの特に異議を唱えず話を進めていくため、英語の勉強法についての「雑談のフレーム」は続いていく。この新たなフレームは、I の「あ勉強:の話か」(1 行目)で「勉強」という語が出たことで、Y の意識が TOEIC の話に立ち戻り、TOEIC の勉強法、スピーキングの勉強法についての質問というところに繋がったのだと思われる。本データの「雑談のフレーム」の終わりは、データ 1、2 と異なり話し手からは生起しない。 I が Y の質問に一通り回答した後、次の質問「初めて英語に触れたのはいつか」に移ることで、「本題のフレーム」へと再び変容することになる。教員である I が授業で次の活動に移行するように主導権を握りフレームを終了させ、次の話題へと進めるという流れになっていた。

Y の一見無礼な振る舞いのように見える唐突な「フレーム」移行は、聞き手・話し手の授業という制度的場面での関係性を下敷きにしてもう一度見直してみると、別の様相を帯びたものになる。まず、つい一ヶ月前まで二人は他の多くの学生たちと共に教室で「教員−学生」として授業という場を共有していた。さらに Y はインタビュー中、I に「先生」と何度も呼びかけていることからも、「教員-学生」という関係性が前景化され、その結果、「研究者-研究協力者」という関係性を持つインタビューの場が後景化する一因になったと考えられる。Y は I が厳しい上下関係を意識しなくてよい話しやすい先生であると認識していることが Y の振る舞いから見て取れる。また、学生である Y が教員である I に英語学習に関する質問をするのは自然なことであり、意義を唱えたり不満や違和感を表出したりすることなく Y も I もそのルールに従っていた。

6. 結語

本稿では、インタビューの聞き手−話し手が教員−学生である制度的場面の性質を帯びたインタ

ビュー・データを取り上げ、インタビュー内の「フレーム」移行の場面における相互行為を検証した。データ 1 からデータ 3 は、それぞれ少しずつ異なる形でフレーム移行がなされ、それぞれ聞き手と話し手のラポールの度合いや関係性によってコミュニケーション方略も異なっていることがわかった。

データ 1、2 では、「雑談のフレーム」に移行する際に言語的資源を用い、許可を取るという行為が行なわれた。ただし、二つのデータでは、聞き手と話し手との親密度の違いから相違点も見られた。データ 1 は、話し手である S が I と話すのは 2 度目であり、加えて、2 度ともオンラインでの「研究インタビュー」という特異な状況であった。S と I はインタビューという目的のもと、ここに集っており、本題以外の話をすることはそれを逸脱することであるため、「雑談のフレーム」に入る際にはコンフリクトを避ける方略 (Jones, 1990) が見られた。それに対し、データ 2 の H と I は対面で既にラポールを構築しており、インタビューでは、雑談をすることによって冗談を言い合える間柄であることをメタメッセージとして相互に伝え合っていた。そのような親しい間柄ではあるが、「教員-学生」という関係性は維持されていることが、フレーム開始・終了時において、授業時間と休み時間を分けるようにはっきりと区別をつける振る舞いから窺えた。

データ 3 の Y はデータ 1、2 と異なり、特に断りなく「フレーム」移行を行なっていた。これは一見無礼な振る舞いのように見えるが、聞き手と話し手が授業という制度的場面で既に構築していた関係性をインタビューの場にも持ち込んでいる可能性が示唆された。自由に発言しているように見えた Y の質問は、聞き手・話し手のコンテクストに対する暗黙の理解により成り立っていたことが明らかになった。

それぞれのデータで程度の差はあれ、無意識のうちに、インタビューの場に授業という制度的場面が持ち込まれ、研究協力者たちは I とのこれまでの関係性をもとに様々なコミュニケーション方略を用い、会話を繰り広げていた。今回扱いきれなかったが、これまで収集したインタビュー・データの中には、明瞭なフレームの変容を伴わずに、本題とは少しずつずれた様々な話題が提供されることが、特に女性研究協力者とのインタビューに見られた。今後も事例研究を重ねることにより、様々な関係性や条件における「フレーム」変容の諸相を明らかにしていきたい。

参考文献

Bateson, Gregory (1955). A theory of play and fantasy. *Psychiatric Research Reports, 2,* 39–51.

Georgakopoulou, Alexandra. (2001) Arguing about future: On indirect disagreement in conversations, *Journal of Pragmatics* 33, 1881-1900.

Goffman, Erving (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Boston: Northeastern University Press.

Goodwin, Charles (1981). *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.

Gumperz, J. John (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

秦かおり（2020）.「Brexit を契機に顕在化した排除・調整・共感の中で－在英日本人移民のナラティブを分析する－」 秦かおり・村田和代(編)『ナラティブ研究の可能性－語りが写し出す社会－』, pp.75-96. 東京：ひつじ書房.

Holstein, A. James & Gubrium, F. Jaber (1995). *The Active Interview*. London: Sage Publications.

Jones, Kimberly, Ann (1990). *Conflict in Japanese conversation*. Ph.D. Dissertation. University of Michigan.

ジョーンズ キンベリー（1993）.「日本人のコンフリクト時の話し合い－アメリカ人研究者から

見た場合－」『日本語学』12(4), 68-74.
串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 『会話分析入門』東京：勁草書房.
高木智世・細田由利・森田笑 (2016).『会話分析の基礎』東京：ひつじ書房.
高梨博子 (2016).「遊び心での即興劇共演のダイナミズム–スピーチスタイルの共鳴とそのメカニズムの分析–」井出祥子・藤井洋子(監) 藤井洋子・高梨博子(編)『コミュニケーションのダイナミズム：自然発話データから』東京：ひつじ書房
桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学–ライフストーリーの聞き方』東京：せりか書房
薛桃子 (2024). 「ある在日朝鮮人二世のアイデンティティ–『韓国』に関するナラティブの分析から–」『社会言語科学会』26(2), 51-66.

トランスクリプト記号

(.)	1.0 秒以下の沈黙	(1.0)	数字の秒数の沈黙
:	長音	h	吸気
@	笑い	¥--¥	笑いながらの発話
[	オーバーラップが始まるところ	=	続けて聞こえるところ
<-->	他と比べて遅いところ	>--<	他と比べて早いところ
↑	その直後に上昇するところ	(　)	発話の内容が聞き取れないところ
((　))	非言語行動の説明		

[1] 本稿の執筆にあたり、立命館大学「ライフイベントに関わる研究支援員制度」の支援を受けた。また、研究に協力してくださった方々にお礼申し上げる。
[2] 「制度的場面」とは診療、授業、裁判などの場面において、専門家が素人との間で交わす相互行為の場面であり、日常会話とは異なる特徴が見られる場面のことである (串田・平本・林, 2017)。
[3] ジョーンズ (1993) は日常会話や話し合いの場におけるコンフリクト(conflict)について、「意見の対立、衝突」(p.68)と定義している。「コンフリクト」は、カタカナ表記で用いられることが多い。

執筆者紹介（掲載順）

秦かおり（HATA, Kaori）
人文学研究科言語文化学専攻　コミュニケーション論講座
岡本能里子（OKAMOTO, Noriko）
東京国際大学　国際関係学部
セメノワ・アナスタシア（SEMENOVA, Anastasia）
言語文化研究科言語文化専攻　博士後期課程
稲葉　皐（INABA, Satsuki）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程
リ・ヘンチョン（LI, Heng Cong）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程
山本由実（YAMAMOTO, Yumi）
人文学研究科言語文化学専攻　博士後期課程

（2024 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2023

ことばと社会③

2024 年　5 月 31 日　発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻